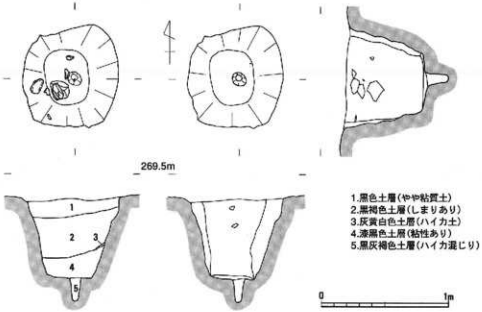
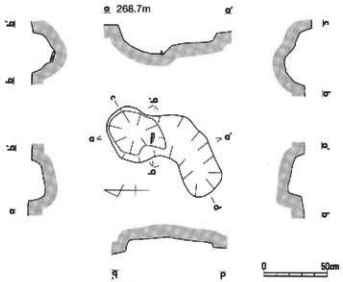
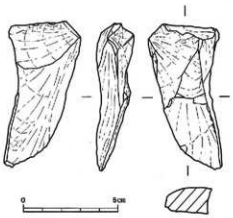
の連続爪形文が施されている。5は内面は二枚貝による条痕、口唇は横ナデによる調整と刻目、外面は二枚貝による条痕による調整の後D字形の連続爪形文が施されている。13は内面は二枚貝による条痕による調整がされ、外面はナデによる調整の後D字形の連続爪形文が施されている。16は内外面は二枚貝による条痕、口唇は横ナデによる調整がされ、口唇には刻み目が施されている。22は内外面は二枚貝による条痕による調整がされ、焼成後外側から穿孔されている。25は外面は二枚貝による条痕後ナデによる調整がされ、口唇は刻み目、外面はC字形の連続爪形文が施されている。42・43は内面は二枚貝による条痕後ナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後羽状縄文が施されている。44は内外面に条痕、口唇にナデによる調整がされている。45は内面に二枚貝による



第71図　D区第3ハイカ上面・落し穴遺構実測図（1：30）



第72図　D区第3ハイカ上面・剥片石器出土状況（1：30）



第73図　D区第3ハイカ上面出土剥片石器実測図（1：2）

条痕、外面は条痕後ナデによる調整がされている。これらの時期は3は羽島下層Ⅱ式、4～15・26～41は羽島下層Ⅲ式、17～18は藤B式である。

石器類（第67～69図、図版64）

1～31は石錘である。いずれも円礫の長辺を基本的に2か所打ち欠いたものである。重量は、1が88.39g、2が50.97g、3が43.97g、4が63.92g、5が97.99g、6が80.97g、7が58.06g、8が74.72g、9が121.32g、10が177.44g、11が90.14g、12が79.72g、13が96.04g、14が82.96g、15が88.25g、16が74.76g、17が36.46g、18が37.32g、19が40.83g、20が52.47g、21が126.10g、22が113.93g、23が115.52g、24が99.64g、25が194.54g、26が198.22g、27が121.75g、28が170.76g、29が193.98g、30が138.43g、31が173.2gである。長さは、1が5.7cm、2が4.9cm、3が5.1cm、4が4.8cm、5が6.2cm、6が5.1cm、7が5.7cm、8が6.5cm、9が7.6cm、10が7.3cm、11が6.4cm、12が5.5cm、13が6.85cm、14が5.7cm、15が7.1cm、16が6.7cm、17が4.5cm、18が4.1cm、19が5.55cm、20が4.45cm、21が6.4cm、22が7.1cm、23が16.9cm、24が6.5cm、25が8.3cm、26が6.9cm、27が8.4cm、28が6.8cm、29が7.8cm、30が8.2cm、31が8.7cmである。幅は、1が4.2cm、2が4.6cm、3が3.5cm、4が4.5cm、5が5.5cm、6が4.7cm、7が3.4cm、8が5.1cm、9が6.45cm、10が5.8cm、11が5.35cm、12が4.7cm、13が5.6cm、14が6.1cm、15が6.3cm、16が4.9cm、17が4.15cm、18が4.2cm、19が3.5cm、20が4.1cm、21が5.8cm、22が5.85cm、23が4.75cm、24が4.7cm、25が6.35cm、26が6.2cm、27が5.5cm、28が6.6cm、29が6.5cm、30が6.2cm、31が7.4cmである。厚さは、1が2.0cm、2が1.6cm、3が1.7cm、4が2.05cm、5が2.1cm、6が2.7cm、7が1.9cm、8が1.8cm、9が1.75cm、10が2.8cm、11が1.7cm、12が2.2cm、13が10.45cm、14が1.7cm、15が1.3cm、16が1.8cm、17が1.6cm、18が1.8cm、19が14.5cm、20が2.0cm、21が2.5cm、22が1.85cm、23が25.5cm、24が2.7cm、25が2.4cm、26が3.05cm、27が2.0cm、28が2.8cm、29が2.6cm、30が2.4cm、31が2.6cmである。

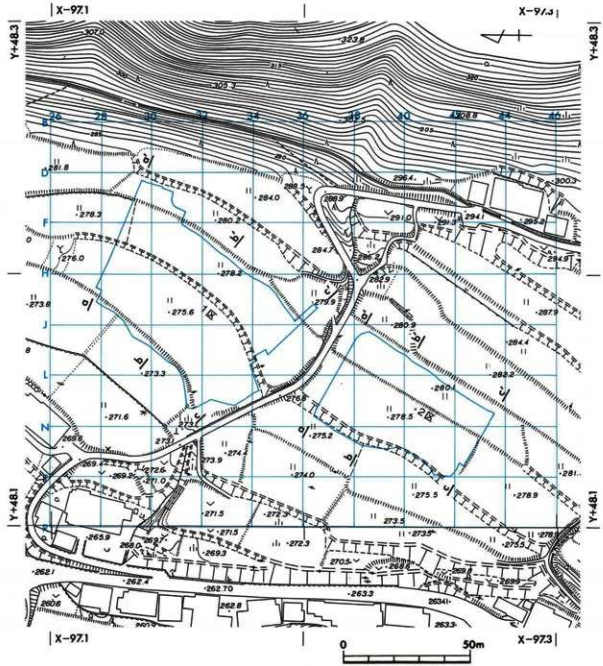
石材は、1・3・5・12・19・22は細粒の花崗岩（アップライト）、2・7・8・16・28は安山岩質の火山灰、4・24は細粒の内緑岩、6・10・20は閃緑岩、9は石英斑岩、11は礫岩（堆積岩）、14は砂岩、15・17は流紋岩質の火山灰、21・27・29・31は流紋岩質の結晶質火山灰、18は玄分岩、25は流紋岩の溶岩、26は花崗岩である。30は安山岩質の火山灰と思われる。13・23は不明である。第69図の1・2は石皿である。3～7は磨石・凹石・叩石である。3・5は側面に磨面をもつ。4は磨面と敲面の両方をもつ。7は凹面と側面に敲面をもつ。これらの重量は、1は3.48kg、2は6.54kg、3は644.63g、4は1.069kg、5は1.89kg、6は2.087kg、7は570gである。また、岩石名は、1・2・3・5・6は花崗岩、4は細粒花崗岩（方向性がある片状花崗岩）、7は花崗岩岩脈である。

Ⅴ－1　神原Ⅱ遺跡1区の調査

1．調査の概要

調査区は、1～3区ある本遺跡の中央に位置する。規模はおよそ長さ80m・幅50m・面積2840㎡である。横断の標高差およそ5m（標高276～281m）の緩斜面で、3段に加工されて水田利用されていた。調査では最上段には遺構・遺物とも認められなかったので、便宜的に残る中段を上段調査区、下段を下段調査区と呼称することにし、第2黒色土層及び第2ハイカ層上面まで調査を行った。

全体的な土層の層序については、3ケ所のトレンチ地点で記録を取った。調査区北端のａ－ａ´地点は、確認した最下層の第2ハイカ層上に順に、第2黒色土層が厚いところで35cm、第1ハイカ



第74図　1・2区調査区設定図（1：1500）

層が80～180cm、第1黒色土層が15～60cmと斜めに堆積しており、その上に厚いところで140cmの厚さで盛土がなされて階段状に造成されていた。b－b´地点は調査区中央部に位置し、土層の堆積状況及び加工段の造成の仕方は、a－a´地点とほぼ同様である。各層の厚さは第2黒色土層が15～40cm、第1ハイカ層が200～270cm、第1黒色土層が35～90cm、加工段造成のための盛土が厚いところで140cmである。c－c´地点は調査区南端に位置し、ここでも土層の堆積状況及び加工段の造成の仕方はa－a´地点及びb－b´地点とほぼ同様であり、各層の厚さは、第2黒色土層が20～30cm、第1ハイカ層が210～320cm、第1黒色土層が25～105cm、そして加工段造成のための盛土が厚いところで90cmあった。

遺物及び遺構については、最も古いものは第2黒色土層中から出土した縄文時代後期と考えられる粗製の縄文土器、石器、及び土坑（SK01）である。第1黒色土層中からは縄文時代晩期の突帯文土器や、石錐、磨石、石鏃、石斧などの石器類が最も古い段階のものであり、弥生時代中・後期の土器も出土している。奈良時代のものとなると、須恵器や土師器、鉄鎌、鉄製紡錘車などを伴った竪穴住居跡1（SI01）を検出できた。それ以降は、神原Ⅰ遺跡同様、14世紀の輸入青磁の出土までは遺物の空白期間が続き、白磁、備前焼、美濃・瀬戸系天目茶碗といった中世陶磁が出土している。そして近世肥前系陶磁を経て、19世紀の端反碗に至るまでが確認でき、時代的に連綿と続いていたことがわかる。また遺構についても、近世の掘立柱建物跡3（SB01・02・03）、溝跡1（SD01）、集石土坑3（SK01・02・03）、その他数基の土坑が検出された。

2．遺構と遺物

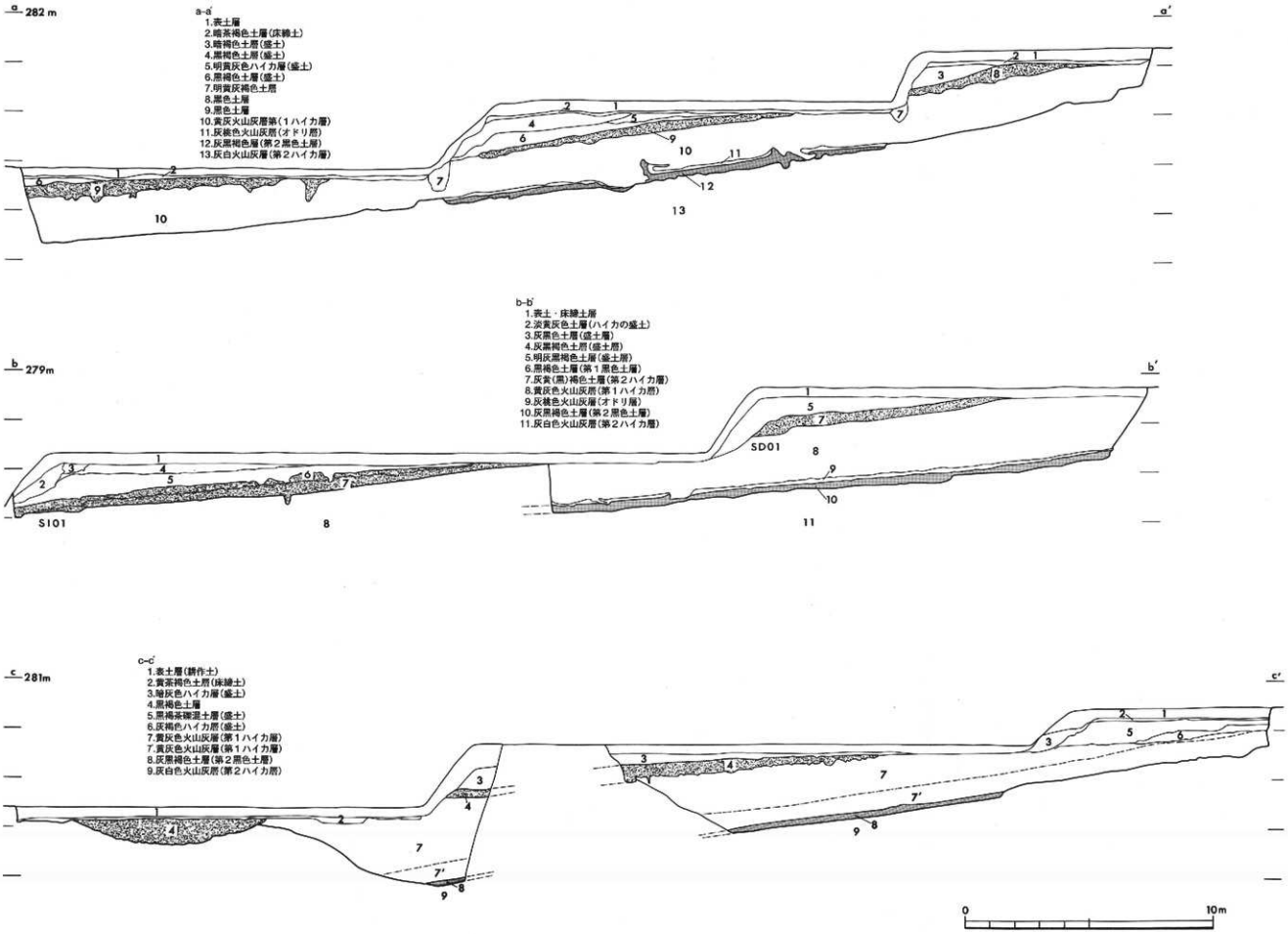
(1) 第1黒色土層検出の遺構

SI01（第77・78図、図版17）

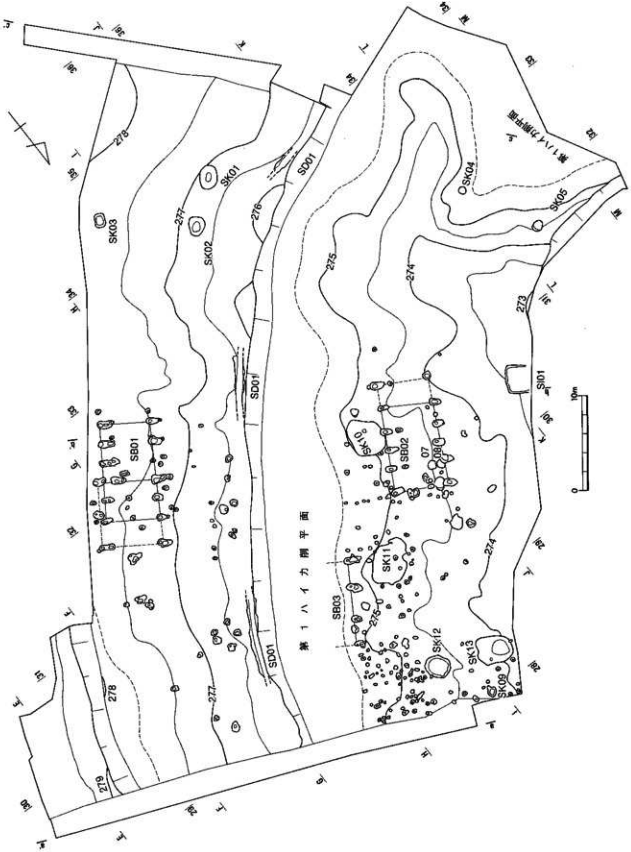
下段調査区の中央西寄りで検出した遺構であり、平面プランが方形の竪穴住居跡である。北西辺が破壊されているため正確な規模は分からないが、1辺2.8m・深さ0.2～0.25mの正方形に近い形と考えられる。底面には、住居跡内中央南西寄りに径0.35m・深さ0.15mの浅いピットが検出されたが、その用途については不明である。また、破壊されているため全容は分からないが、北西辺にはカマドが付設されており、2穴のピット中の片方には側壁に当たる石組が残され、またカマド底面には灰褐色の焼土が広がっていた。この住居跡に伴う遺物には、南から西のコーナーにかけて主に須恵器と土師器が出土し、また東側のコーナー付近を中心に鉄製品が集中的に出土した。いずれも床面よりわずかに浮いた状態で検出した。

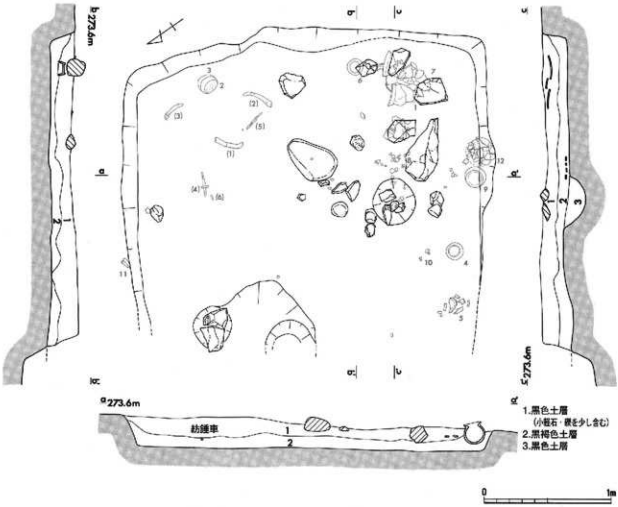
SI01出土遺物（第79・80図、図版39・40）

第79図1～6が須恵器であり、7～12が土師器である。須恵器はいずれも坏類で、器形はいずれも底部が平たく、口縁部の立ち上がりがほぼ直線的に外傾する。ただし、1～3が無高台、4～6が高台付の坏である。また、底部は1・2が回転糸切り痕、4・5が静止糸切り痕、6がヘラ切り痕を残し、3はヘラ切りののちナデが加わり、かつ、板目状の圧痕が認められる。底部以外の調整は、ほぼ回転ナデが施され、一部にナデが認められる。高台は、いずれもほぼ体部と底部との境に寄っており、短く、外にわずかに開く。1は口径12.7cm、器高4.2cm、底径8.0cm、2は口径13.5cm、器高4.5cm、底径8.7cm、3は口径13.8cm、器高3.8cm、底径9.6cm、4は口径13.2cm、器高4.6cm、底

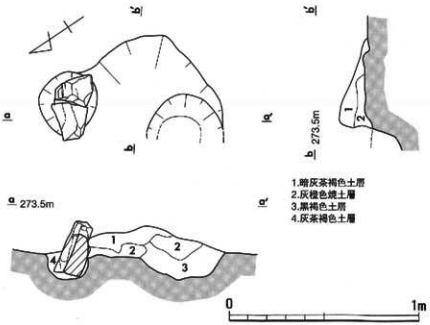


第75図　1区土層断面図（1：150）

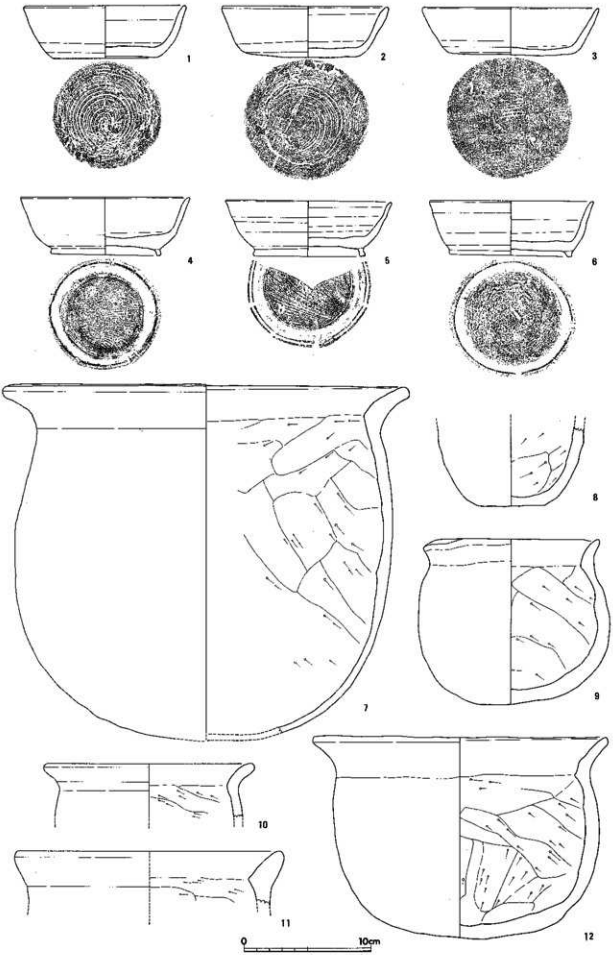

第１ハイカ面検出遺構
第１ハイカ面平面
SB01
SB02
SB03
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
SK13
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40



第77図　１区ＳＩ01遺構実測図（１：30）



第78図　１区ＳＩ01カマド遺構実測図（１：20）



第79図　Ⅰ区ＳＩ01出土遺物実測図（1）（1：3）

径8.5cm、5は口径13.1cm、器高4.35cm、底径9.1cm、6は口径12.9cm、器高4.4cm、底径9.6cmである。色調は、1・3・6が淡灰色、2・4・5が灰色を呈している。

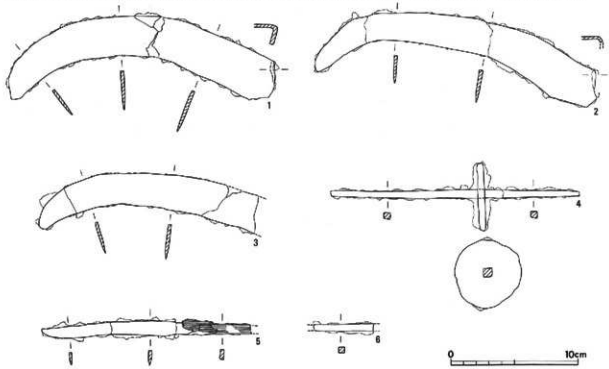
土師器は甕類とみられ、いずれも口縁部が「く」の字状に外反する単純口縁のものである。9は完形品で、口径14.5cm、器高13.1cm、胴部最大径15.1cmである。7と12は0分の一ほどが残存し、推定で、7は口径31.4cm、器高28.1cm、胴部最大径29.8cm、12は口径23.2cm、器高15.8cm、胴部最大径20.6cmである。10・11は口縁部の、8は底部の小破片である。調整は、いずれも基本的に口縁部は内外面とも横ナデ、体部が外面が横ナデまたは不定方向のナデであり、内面はヘラケズリが施されている。9・11・12の外面にはススが付着している。

第80図の鉄製品は、1～3が曲刃鎌であり、1・2の基部には柄を装着するための折り返しが認められる。

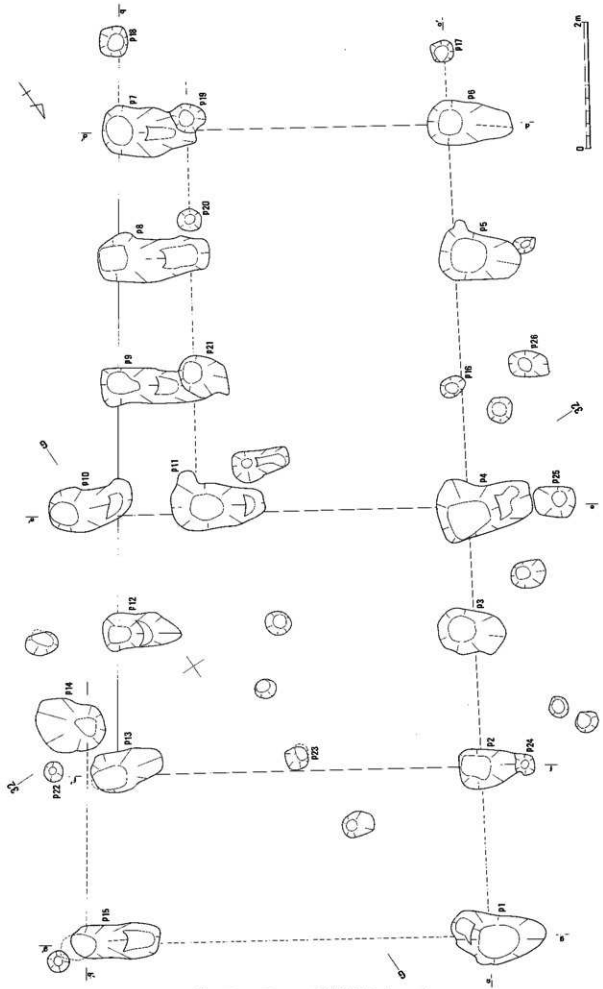
これらの出土遺物のうち、時期の分かるものは、須恵器坏類であり、おおむね奈良時代のものと考えられる。1～6はすべて坏身で、うち1～3は無高台、3～6は高台付きのもので、また外傾する口縁部を有する。調整は、1～2は回転ナデとナデと回転糸切りである。3は回転ナデとナデで、底部はヘラ切りのちナデで板目状の圧痕が残る。このため、産地は石見ではないかと考えられる。5は回転ナデと静止糸切りである。4・6はナデと回転ナデとヘラけずりのちナデ・静止糸切りである。1～3には内外面に火だすき風の帯状の色斑がみられ、1には重ね焼きの痕跡が認められる。

SB01（第81～83図、図版14・24）

上段調査区中央部で検出した遺構で、長軸を北々東に向けた掘立柱建物跡群である。柱穴列を追ってみると、2棟の建物跡があったように考えられる。まず、P.2－P.6－P.7－P.13で構成される1間×4間の建物跡が想定される。この場合、桁行P.2－P.6（5間・10.1m）、P.7－



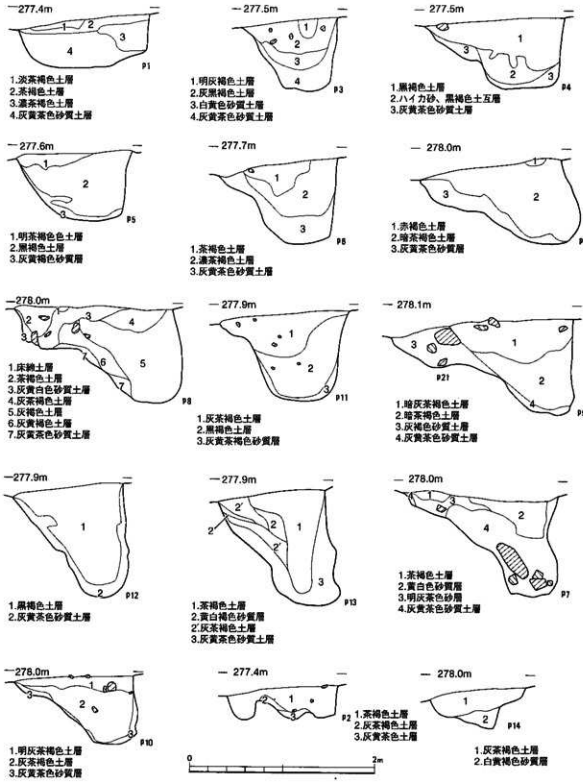
第80図　1区SI01出土遺物実測図（2）（1：3）



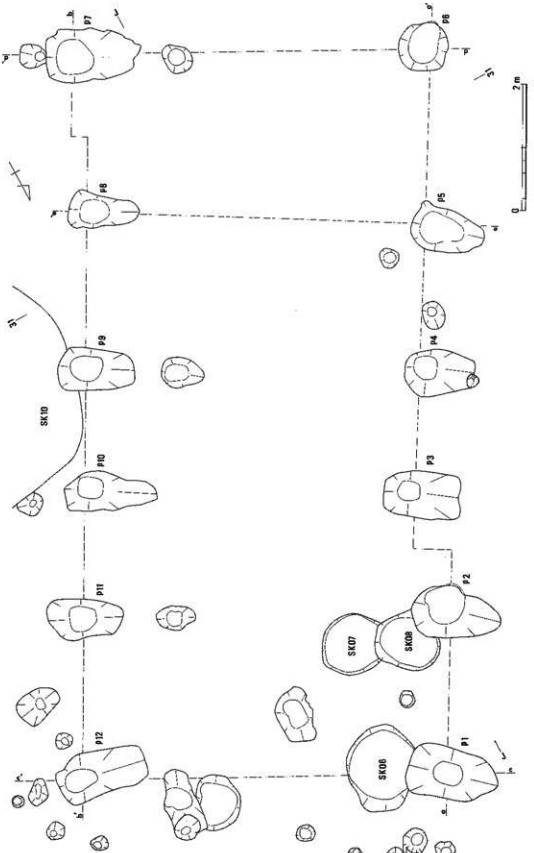
第81図　1区ＳＢ01遺構実測図（1：60）

第82図　1区ＳＢ01遺構断面図（1：60）

P.13（4間・10.1m）、梁行P.7－P.6（1間・5.2m）、P.13－P.2（2間・5.7m）の規模である。柱穴は、そのほとんどが斜面の低い側から高い側に向かって斜めに掘り込まれているのが特徴で、その一番深い部分に柱が立てられていたものと考えられる。柱の抜き取り痕が明瞭に分かるのがP.9の土層堆積状況からである。これから推定される柱の径はおよそ0.25mである。裏込めには灰黄茶色砂質土、黄白褐色砂質土、灰茶褐色土が用いられている。桁行、梁行の支柱となるそれ



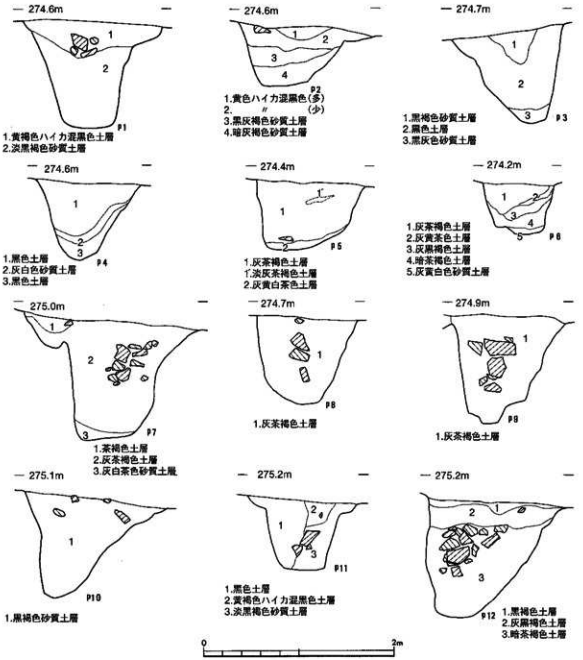
第83図　1区ＳＢ01柱穴土層断面図（1：40）



第84図　1区ＳＢ02遺構実測図（1：60）

第85図　1区ＳＢ02遺構断面図（1：60）

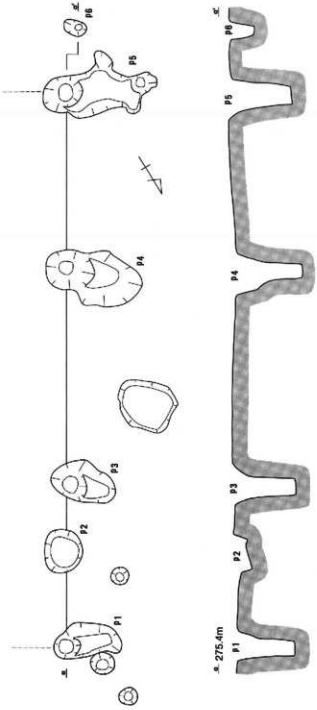
それの柱穴の規模は、P.2（上端径0.6～1.0ｍ・下端径0.35～0.45ｍ・深さ0.35ｍ）、P.3（上端径0.7～1.1ｍ・下端径0.45ｍ・深さ0.8ｍ）、P.4（上端径1.0～1.5ｍ・下端径0.5～0.65ｍ・深さ0.75ｍ）、P.16（上端径0.3～0.4ｍ・下端径0.2ｍ・深さ0.55ｍ）、P.5（上端径0.8～1.3ｍ・下端径0.55ｍ・深さ0.7ｍ）、P.6（上端径0.7～1.3ｍ・下端径0.4ｍ・深さ0.9ｍ）、P.7（上端径0.8～1.5ｍ・下端径0.4～0.5ｍ・深さ1.0ｍ）、P.8（上端径0.7～1.75ｍ・下端径0.4ｍ・深さ1.0ｍ）、P.9（上端径0.6～1.7ｍ・下端径0.35～0.5ｍ・深さ1.05ｍ）、P.12（上端径0.6～1.2ｍ・下端径0.25～0.35ｍ・深さ1.2ｍ）、P.13（上端径0.65～1.1ｍ・下端径0.35～0.6ｍ・深さ1.25ｍ）、P.23（上端径0.35ｍ・下端径0.2～0.25ｍ・深さ0.55ｍ）であり、また付随する柱穴と考えられるものに、P.11（上端径0.75～1.45ｍ・下端径0.4～0.5ｍ・深さ0.95ｍ）、P.17（上端径0.35ｍ・下端径0.2ｍ・深さ0.4ｍ）、P.18（上端径0.45～0.5ｍ・下端径0.25ｍ・深さ0.4ｍ）が挙げられる。



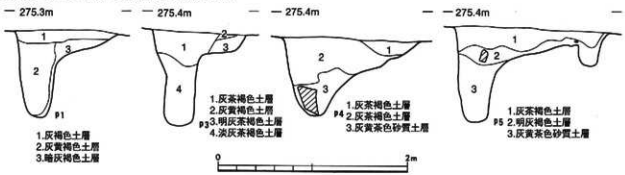
第86図　１区ＳＢ02柱穴土層断面図（１：40）

また、前述の建物跡と重なり合うように、もう1棟別の建物跡の存在を想定させる柱穴列も検出できた。P.1－P.4－P.10－P.15で結ばれる1間×3間の建物跡で、この場合、P.1－P.15（1間・6.4m）、P.15－P.10（2間・6.8m）、P.10－P.25（2間・7.8m）、P.11－P.19（3間・6.2m）、P.25－P.26（1間・2.2m）の規模となる。柱穴の規模は、P.1（上端径0.8～1.5m・下端径0.5～0.6m・深さ0.5m）、P.15（上端径0.5～1.4m・下端径0.4～0.55m・深さ0.8m）、P.14（上端径0.8～1.1m・下端径0.3・深さ0.45m）、P.10（上端径0.7～1.3m・下端径0.35～0.45m・深さ0.75m）、P.25（上端径0.5～0.7m・下端径0.25・深さ0.2m）、P.21（上端径0.6～0.9m・下端径0.3～0.35m・深さ0.5m）、P.20（上端径0.35m・下端径0.15m・深さ0.3m）、P.19（上端径0.45～0.55m・下端径0.25m・深さ0.5m）、P.26（上端径0.4～0.6m・下端径0.2m・深さ0.5m）。この柱穴列と前述の掘立柱建物跡との時間的前後関係は、P.21がP.9によって切られていることから（第83図参照）、掘立柱建物跡の方が後に建てられたものと推測できる。

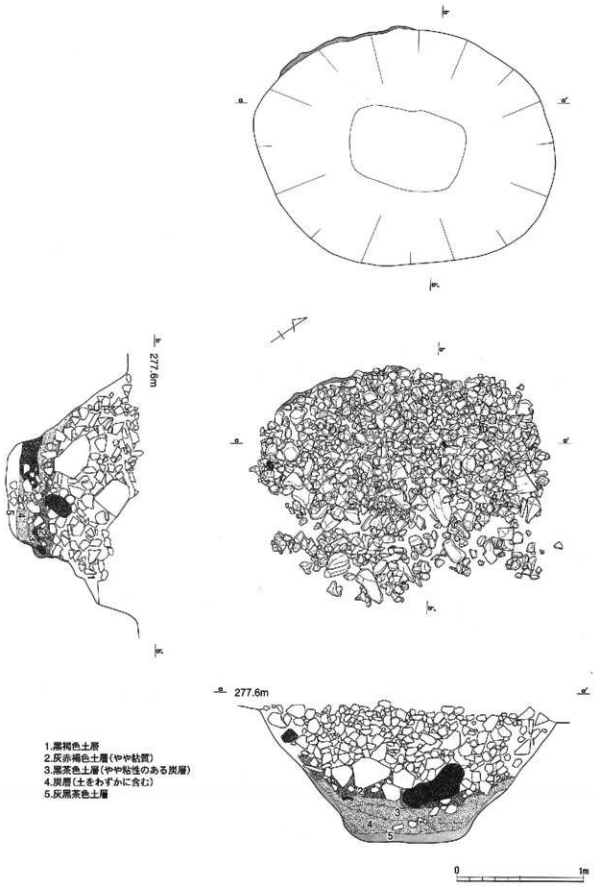
出土遺物については、P.3とP.25の間の小ピットから陶磁器の細片が出



第87図　1区SB03遺構実測図・同断面図（1：60）



第88図　1区SB03柱穴土層断面図（1：40）

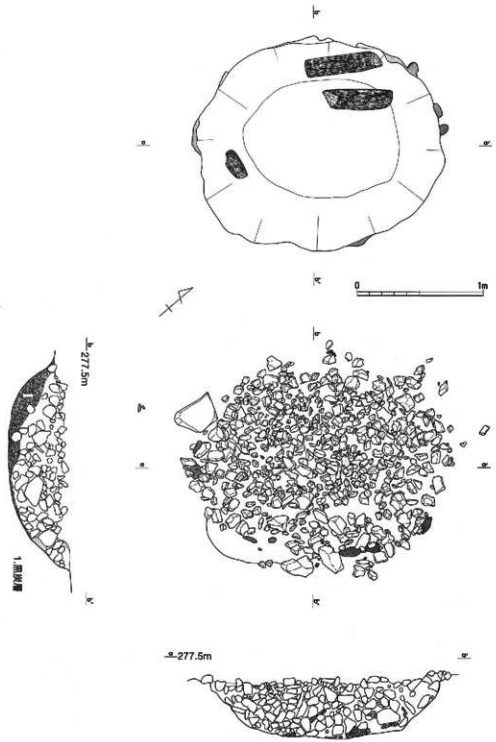


第89図　1区ＳＫ01遺構実測図（1：30）

土している。遺構の明確な時期については不明だが、これより判断すれば近世以降のものと考えられる。

ＳＢ02（第84～86図、図版14・15・16）

下段調査区中央部で検出した遺構である。ＳＢ01の西北西30ｍに位置し、Ｐ.1－Ｐ.6－Ｐ.7－Ｐ.12で構成される１間×５間の掘立柱建物跡である。この場合、桁行Ｐ.1－Ｐ.6、Ｐ.7－Ｐ.12



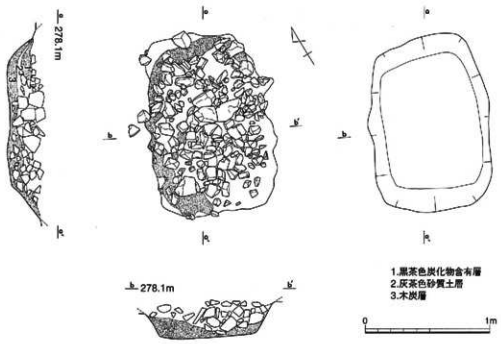
第90図　１区ＳＫ02遺構実測図（１：30）

（いずれも5間・11.4m）、梁行P.6－P.7（1間・5.6m）、P.12－P.1（1間・5.7m）の規模である。SB01同様、柱穴はそのほとんどが斜面の低い側から高い側に向かって斜めに掘り込まれており、その一番深い部分に柱が立てられていたものと考えられる。柱穴の規模は、P.1（上端径0.8～1.5m・下端径0.35～0.5m・深さ0.7m）、P.2（上端径0.8～1.45m・下端径0.6m・深さ0.3m）、P.3（上端径0.7～1.2m・下端径0.3～0.35m・深さ0.6m）、P.4（上端径0.75～1.1m・下端径0.4m・深さ1.0m）、P.5（上端径0.7～1.15m・下端径0.5～0.7m・深さ0.8m）、P.6（上端径0.75m・下端径0.45～0.7m・深さ0.55m）、P.7（上端径0.85～1.5m・下端径0.55～0.6m・深さ1.25m）、P.8（上端径0.55～1.0m・下端径0.4～0.45m・深さ1.0m）、P.9（上端径0.65～1.2m・下端径0.4～0.5m・深さ1.15m）、P.10（上端径0.65～1.45m・下端径0.35～0.4m・深さ0.65m）、P.11（上端径0.65～1.2m・下端径0.4m・深さ0.35m）、P.12（上端径0.7～1.4m・下端径0.35～0.5m・深さ0.25m）である。

この遺構に伴う出土遺物はなく、明確な時期については不明だが、SB01の例を参考にすれば近世以降のものと考えられる。

SB03（第87・88図）

下段調査区東部で検出した遺構である。SB02の北東18m離れて位置し、1辺3間の掘立柱建物跡である。北西辺は1列分の柱穴列しか残されていないが、これを桁行と想定すれば、桁行P.1－P.5の規模は3間8.8mとなる。SB01、SB02同様、柱穴はそのほとんどが斜面の低い側から高い側に向かって斜めに掘り込まれているのが特徴で、その一番深い部分に柱が立てられていたものと考えられる。柱穴の規模は、P.1（上端径0.55～1.1m・下端径0.2m・深さ0.9m）、P.3（上端径0.6～1.05m・下端径0.25m・深さ1.0m）、P.4（上端径0.9～1.5m・下端径0.2m・深さ1.0m）、



第91図　I区SK03遺構実測図（1：30）

P.5（上端径0.7～1.6ｍ・下端径0.25ｍ・深さ1.0ｍ）であり、また建物に付随する柱穴としてP.2（上端径0.6～0.7ｍ・下端径0.45ｍ・深さ0.2ｍ）、P.6（上端径0.25～0.4ｍ・下端径0.1ｍ・深さ0.4ｍ）であり、これらが主だった柱跡と考えられる。

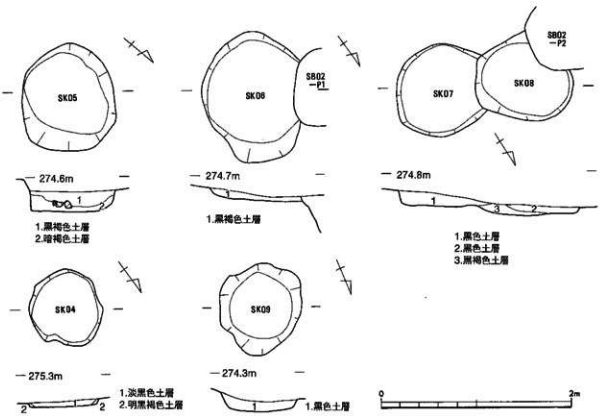
この遺構に伴う出土遺物はなく、明確な時期を特定することはできないが、ＳＢ01・02を参考にすれば、近世以降のものと考えられる。

ＳＫ01（第90図、図版19）

上段調査区西部で検出した集石土坑である。規模は長さ2.4ｍ・幅1.9ｍ・深さ1.1ｍの楕円形を呈しており、深さ0.75ｍの位置まで焼石がたっぷり詰まっていた。焼石の下は、断面図にみられるように、上層から順に、やや粘質の灰赤褐色土と木炭、やや粘性のある黒茶色の炭層、土をわずかに含む炭層、そして灰黒茶色土が堆積している。遺構に伴う出土遺物としては、焼石表面から２点の陶磁器片（そのうち１点は第99図、図版60参照）が出土している。

ＳＫ02（第89図、図版19・20）

上段調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ01の北東5.5ｍに位置する集石土坑である。規模は長さ2.0ｍ・幅1.7ｍ・深さ0.5ｍの楕円形を呈しており、焼石は土坑上端面よりも外に、長さ2.15ｍ・幅1.9ｍの範囲にまであふれていた。焼石の下は、土坑の壁面及び底面が赤黄色く焼け、北西壁に沿って長さ0.55ｍと0.6ｍの２本の木炭が、また南壁下には0.25ｍの木炭が残っており、それぞれの周囲には広く炭が散らばっていた。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。



第92図　１区ＳＫ04～09遺構実測図（１：40）

ＳＫ03（第91図、図版20）

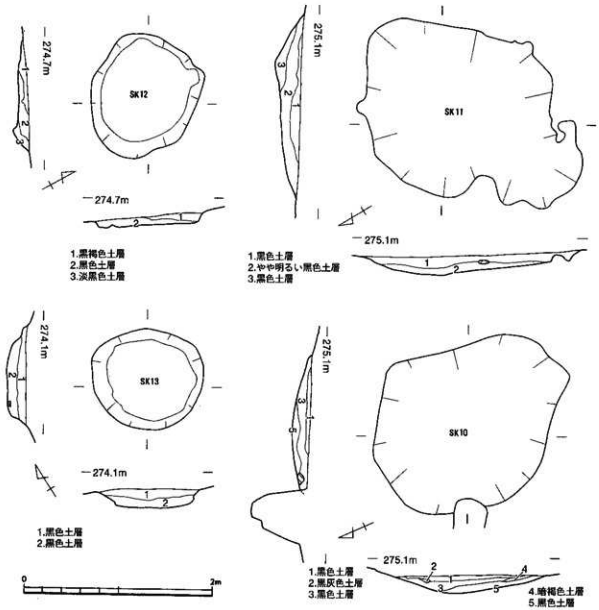
上段調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ01の東12.5ｍに位置する集石土坑である。規模は長さ1.4ｍ・幅0.95ｍ・深さ0.3ｍの長方形を呈しており、土坑内いっぱいに焼石が詰まっていた。焼石の下は、土坑の壁面及び底面が赤黄色く焼け、底面上５～25㎝もの厚さで炭が堆積していた。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

ＳＫ04～09（第92図）

ＳＫ04は下段調査区南西部で検出した遺構で、ＳＩ01の南々西20ｍに位置する円形の浅い土坑である。規模は径0.8ｍ・深さ0.05ｍを測る。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

ＳＫ05は下段調査区西部、ＳＫ01の北西９ｍに位置する円形の浅い土坑である。規模は径0.9ｍ・深さ0.1ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

ＳＫ06は下段調査区中央部、ＳＢ02と同位置にあり、ＳＢ02のＰ.１によって切られている土坑



第93図　Ⅰ区ＳＫ10～13遺構実測図（１：40）

である。規模は上端径1.15～1.4ｍ・下端径1.1ｍ・深さ0.05～0.09ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められず、時期についても不明であるが、切り合い関係から少なくともＳＢ02よりは古い時期のものである。

ＳＫ07は下段調査区中央部、ＳＢ02と同位置にあり、後述するＳＫ08を切っている浅い円形の土坑である。規模は径1.0ｍ・深さ0.15ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められず、時期については不明であるが、ＳＫ08を切っていることから、ＳＫ08よりは新しいものである。

ＳＫ08は下段調査区中央部、ＳＢ02と同位置にあり、ＳＢ02のＰ.２、またＳＫ07によって切られている浅い円形の土坑である。規模は長さ10.5ｍ・幅9.5ｍ・深さ0.1ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められず、時期については不明であるが、ＳＫ07によって切られていることからＳＫ07よりは古い遺構である。

ＳＫ09は下段調査区北端部に位置する円形の浅い土坑である。規模は径0.9ｍ・深さ0.12ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

ＳＫ10～13（第93図）

ＳＫ10は下段調査区中央部、ＳＢ02の東側に隣接する不整形の土坑である。規模は長さ2.2ｍ・幅1.9ｍ・深さ0.19ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められず、時期については不明であるが、ＳＢ02のＰ.９によって切られていることから、ＳＢ02よりは古い遺構である。

ＳＫ11は下段調査区東部中央寄り、ＳＢ02とＳＢ03の中間に位置する不整形の土坑である。規模は長さ2.4ｍ・幅1.8・深さ0.28ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

ＳＫ12は下段調査区北部、ＳＫ11の北12ｍに位置するややいびつな円形の土坑である。規模は長さ1.3ｍ・幅1.1ｍ・深さ0.1～0.17ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

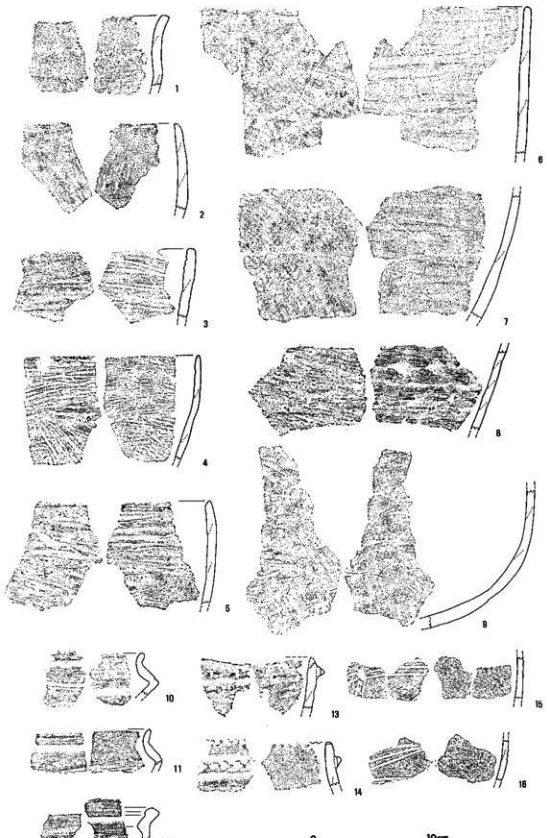
ＳＫ13は下段調査区北部、ＳＫ12の西6.5ｍに位置するやや楕円形の土坑である。規模は長さ1.2ｍ・幅1.1ｍ・深さ0.2ｍ。遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

⑵　第１黒色土層出土の遺物

縄文土器（第94図、図版46）

１～９・13・14は深鉢、10～12・15・16は浅鉢である。うち、１～３・10～14は口縁部片、７～８・15～16は体部片である。

１は内外面とも丁寧な横ナデが調整されている。２は内面にナデ、外面にミガキが調整されている。３は内面に条痕風のナデと条痕、外面にナデが調整され、外面にはススが付着している。４は内面に条痕地状のナデ、外面にケズリ風のやや粗い横ナデとケズリ風のやや粗いナナメ方向のナデが調整され、外面にススが付着している。５は内面に横方向のナデ、外面にナデとケズリまたは横方向のナデが調整され、僅かにススが付着している。６は内面に横方向のナデ、外面にはミガキが調整され、端部は面取りされていて丸くなっている。また、外面にはススが付着している。７は内面には丁寧な横ナデ、外面には丁寧な斜め方向のナデが調整され、ススが付着している。８は内外面ともナデが調整され、外面にはススが付着している。９は丸みを帯びた体部で、内面は比較的丁寧なナデ、外面は横方向または斜め方向のケズリおよびケズリのちナデが調整されている。また内面にはススが付着している。10は内外面に横方向のミガキ、外面にナデとケズリが調整され、また



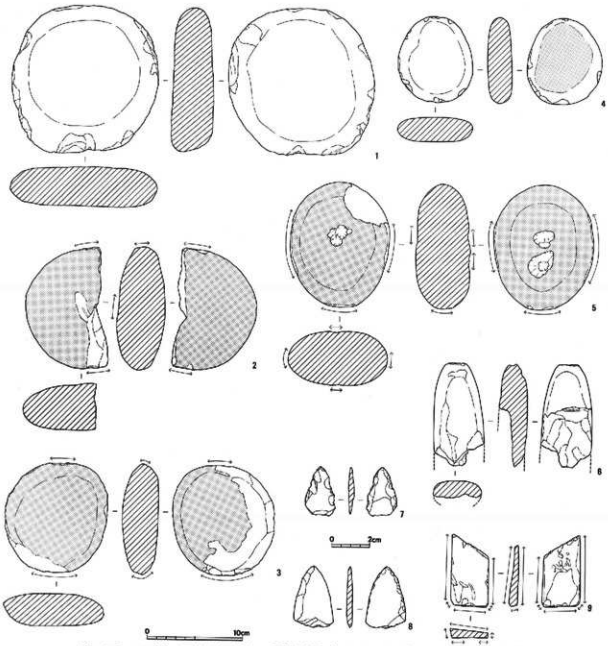
第94図　Ⅰ区第Ⅰ黒色土層出土縄文土器実測図（1：3）

外面に1条の沈線が施されている。11は内外面にミガキ、外面にケズリまたはナデが調整され、また外面に1条の沈線が施されている。12は内外面ともミガキが調整されている。13は内外面にナデが調整され、口唇には有刻突帯が施されている。14は内外面にナデが調整され、口唇に刻目、外面に刻目突帯が施されている。15は内外面にナデが調整され、少なくとも3本の平行沈線が施されている。16は内外面ともミガキに近い丁寧なナデが調整され、少なくとも外面に横1本と斜め3本の沈線と2本の沈線が施されている。

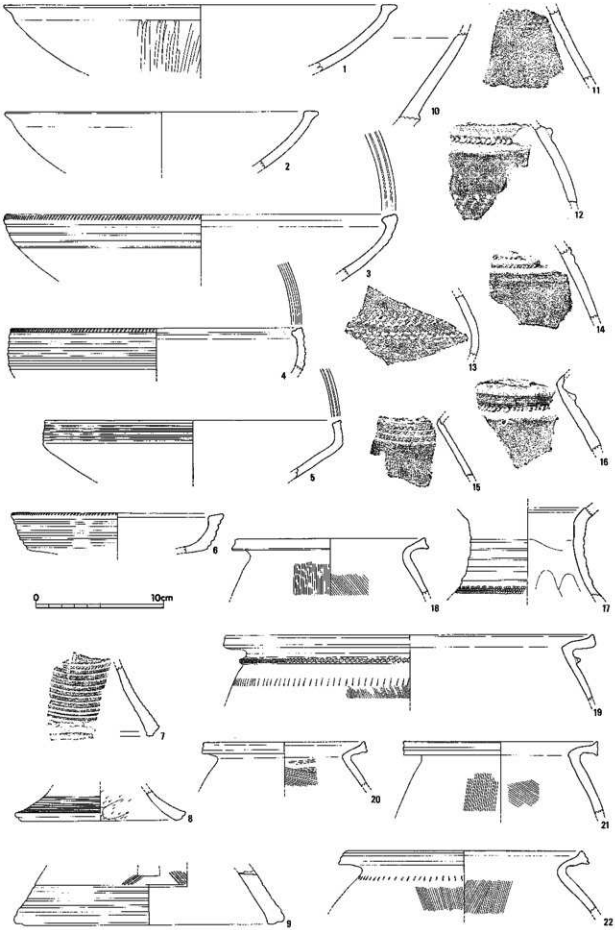
石器類（第95図、図版64）

1～5は磨石、6は磨製石斧、7～8は石鏃、9は砥石である。

1は両平坦面に磨面をもつ。2～3は両平坦部に磨面と側縁に敲面をもつ。4は平坦部の片面のみ磨面をもつ。5は前面に磨面をもつが、平坦面の両面に凹みがあることから凹み石としても使



第95図　1区第1黒色土層出土石器実測図（1：4、ただし7・8は1：2。）



第96図　Ⅰ区出土弥生土器実測図（1）（1：3）

用されたと考えられる。7～8は平基無茎式である。9は7面使用されている。

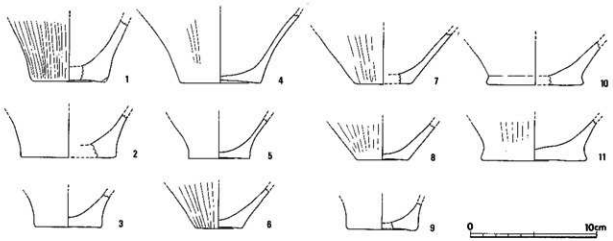
これらの重量は、1は1.69kg、2は755.15g、3は673.72g、4は272.93g、5は1.18kg、6は206.11g、7は1.16g、8は2.05g、9は39.50g、長さは1は15.1cm、2は12.6cm、3は11.4cm、4は9.0cm、5は13.2cm、6は10.7cm、7は2.5cm、8は3.3cm、9は7.4cm、最大幅は1は15.3cm、2は7.7cm、3は10.6cm、4は7.9cm、5は10.5cm、6は5.3cm、7は1.6cm、8は2.1cm、9は3.9cm、最大厚は1は4.4cm、2は4.9cm、3は3.8cm、4は2.5cm、5は5.8cm、6は2.85cm、7は0.3cm、8は0.3cm、9は0.9cmである。

石材は、1・4が花崗岩、2が比較的細粒の閃緑岩、3が細粒の花崗岩、6が流紋岩、8・9が流紋岩質の火山灰ではないかとみられ、5・7は不明である。

弥生土器（第96・97図、図版56）

96図は10以外は中期のものと思われる。1～6・9は高坏の坏部である。1・2はナデとミガキによる調整がなされている。3～4は内面にナデ調整、口縁に凹線、外面口唇に刻目文、外面に凹線（3はナデ調整も）が施されている。5は内面にナデ調整、口縁に凹線、外面にナデ調整と凹線が施されている。6は内面にナデ調整と思われるもの、外面口唇に刻目、外面にナデとミガキによる調整と凹線が施されている。7～9は高坏の脚部である。調整は、7～8は内面にケズリ、端部にナデ、外面にナデと、凹線による施文がなされている。9は内面にナデ、端部に凹線、外面にナデと、凹線による施文がなされている。10は高坏の坏部と思われ、調整はミガキである。時期は不明である。12・14～16・19は「塩町式」の甕である。12・16は貼り付け突帯の上に刻目が施されており、12にはさらに刺突文もみられる。15は凹線と刻目文の施され方から、他のものより新しい段階のものであると考えられる。11は甕と思われ、内面にナデ、外面にハケ目による調整と、凹線・列点文が施されている。13は胴部と思われるが器種は不明で、内面にはハケ目、外面にはナデによる調整と、綾杉文と刺突文が施されている。17は壺の頸部で、内面にナデ・指頭ナデによる調整と沈線、外面にナデ調整と沈線・列点文が施されている。18・20～22は甕である。18・20～21は主に横ナデとナデ・ハケ目による調整がなされている。19は横ナデとハケ目による調整の他に、刻目の入った突帯と刺突文を有する。22も横ナデとハケ目による調整の他に刺突文を有する。

97図はすべて底部である。ほとんどが平底といってよい形であるが、4はやや上げ底である。主



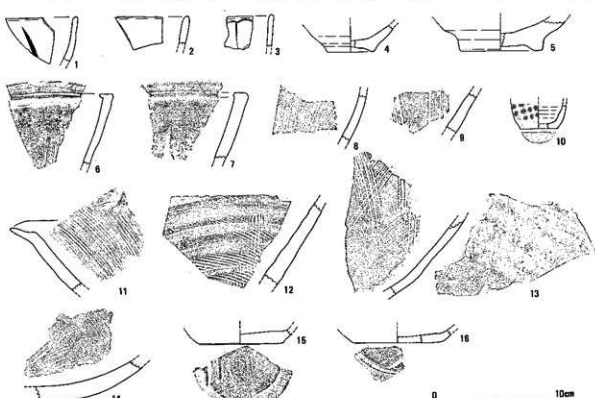
第97図　I区出土弥生土器実測図（2）（1：3）

な調整はミガキとナデである。

陶磁器類（第98・99図、図版59・60）

中世陶磁器は、様々な器種のものが出土した。1～3は青磁碗である。1は蓮弁を表した青磁碗で、淡灰色の胎土に淡緑釉がかかっており、嵌入は見られない。これは、1 4世紀のものである。2は灰褐色の胎土に緑褐色釉がかかっており、15世紀代のものである。3も1と同じく蓮弁を表した青磁碗で、淡灰色の胎土に淡緑青釉がかかっており、嵌入が見られる。4は16世紀後半の李朝の小鉢の底部で、内面と底部に砂目積痕がみられる。5は16世紀代の李朝の碗で、全面に黄白褐色釉がかかり、内面に砂目積痕がみられる。6～9・11～14は摺鉢で、そのうち6・8・14は瓦器の摺鉢である。6は色調は白亜色と白灰色で、縦方向の櫛書きがみられる。8は色調は白灰色で、櫛書きがみられる。14は16世紀のもので、色調は淡白褐色で、櫛書きがみられる。7は外面の色調は灰色および白褐色で、内面はススの付着のため黒褐色である。櫛書きもみられ、16世紀末のものである。9は黒色の胎土に白褐色と淡白灰色が入っており、櫛書きがみられる。11は色調は淡赤褐色と淡赤灰色である。12は備前焼の摺鉢である。色調は明赤紫色で、櫛書きがみられる。13にも櫛書きがみられる。10は16世紀代の茶入れで、内外面に黒茶褐色釉がかかっており、底部に糸切り痕がみられる。15～16は坏の底部で、16世紀のものである。色調は15は淡赤褐色、16は淡白褐色で、いずれも底部に回転糸切り痕がみられる。

近世のものでは6点図示した（2・6・10・11・16・24）。2・6は、陶胎染付の雑器類の碗で、2は呉須鉄釉がかかる。17世紀後葉～18世紀前葉とみられる。10は端反碗で、1810～1868年のものとみられる。11は、広東型の碗で、19世紀前半のものである。16は波佐見産かと思われる皿で、内

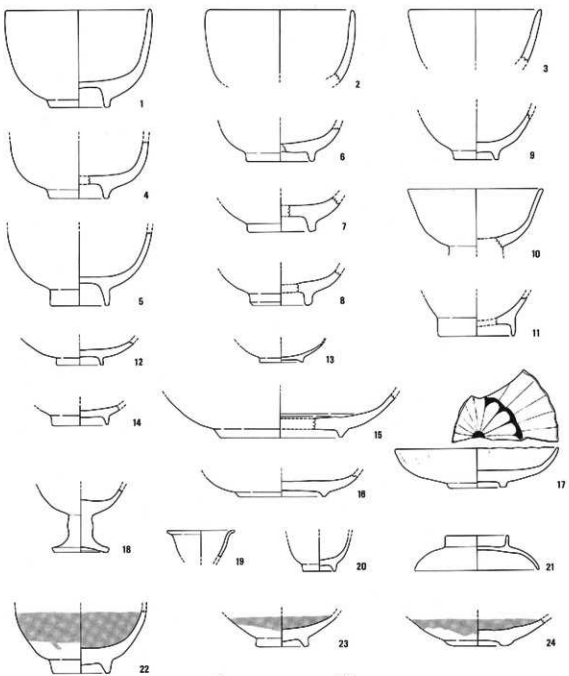


第98図　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡出土陶磁器実測図（1）（1：3）

面見込みに印花文があり、その周囲は蛇の目状に釉の掻きおとしがみられる。18世紀前半～中葉のものとみられる。24は肥前系の陶器皿で、砂目積で、かつ蛇の目掻きがみられる。1610～50年代のうちでも後半の可能性が高いとみられる。

銅銭（第36図、図版61）

1点出土している。「元」「寶」以外の2文字が分かりづらいが、「熙寧元寶」である可能性が高い。「熙寧元寶」の初鋳年は1068である。径2.4cm、厚さ0.15cm、重さ2.46gである。



第99図　I区2区出土陶磁器実測図（2）（1：3）

(3) 第２黒色土層検出の遺構

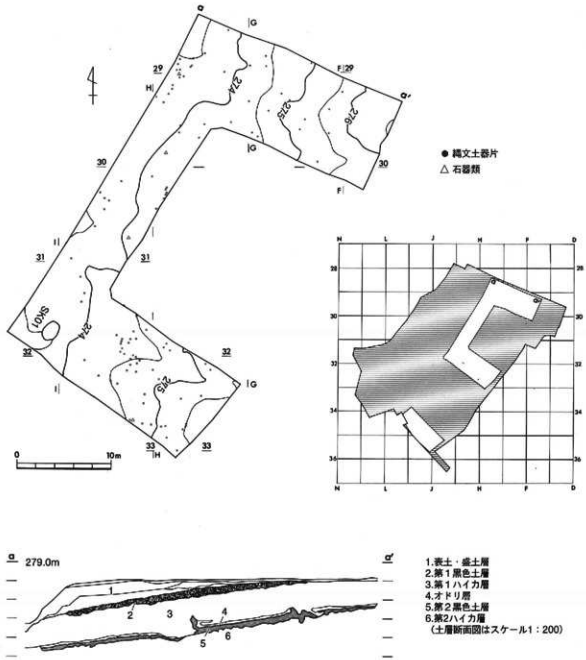
ＳＫ01（第87図）

上端は径2.2ｍの円形、下端は径1.3ｍの半円形を呈している。深さは1.05ｍ。１区第２ハイカ土上面で唯一の遺構であるが、遺物は伴わなかった。

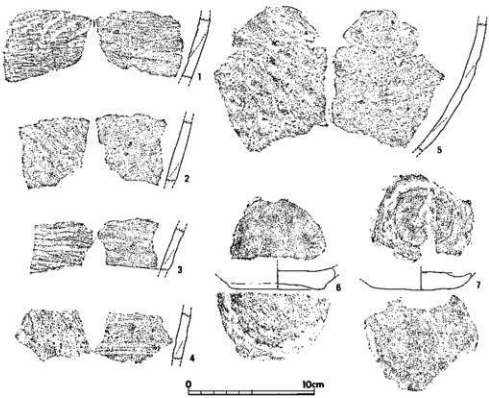
(4) 第２黒色土層出土の遺物（第100図）

縄文土器（第101図、図版46）

いずれも粗製の土器片であり、細片が多かった。ここに図示したものは７点である。１～４は体



第100図　１区第２黒色土層遺物出土分布図および第２ハイカ上面地形測量図（１：400）



第101図　1区第2黒色土層出土縄文土器実測図（1：3）

部の小片である。1は内面に比較的丁寧なナデが施され、ヘラ状工具による浅くて細い筋が横方向に入っている。外面にはケズリが施されている。2は内外面にナデが施されている。3は内面にナデ外面にはケズリが施されている。4は内面はケズリ、外面はケズリおよびナデが施されている。5はやや丸みを帯びた体部と考えられ、内外面にナデが施されている。6～7は底部で、6は上げ底、7は平底である。調整は、6は内面は丁寧なナデで、外面は粗いナデである。7は内面はナデで、外面は比較的丁寧なナデである。

Ⅴ－2　神原Ⅱ遺跡2区の調査

1．調査の概要

2区は、1～3区ある本遺跡の南側に位置する調査区である。規模はおよそ長さ62m・幅40m・面積2012㎡である。横断の標高差およそ4m（標高276～280m）の緩斜面で、3段に造成されて水田利用されていた。

全体的な土層の層序については、3か所のトレンチ地点で記録を取った。調査区北端のａ－ａ´地点は、確認した最下層の第2ハイカ層上に順に、第2黒色土層が25～35cm、第1ハイカ層が160～280cm、第1黒色土層が50～130cmと斜めに堆積しており、その上に厚いところで160cmの厚さで客土され、階段状の耕地に加工されていた。ｂ－ｂ´地点は調査区中央部に位置し、土層の堆積状況及び加工段の造成の仕方はａ－ａ´地点とほぼ同様である。各層の厚さは、第2黒色土層が6～14cm、第1ハイカ層が140～290cm、第1黒色土層が厚いところで60cm、そして加工段造成のための盛土が厚いところで100cmであった。ｃ－ｃ´地点は調査区南端に位置し、ここでも土層の堆積状況及び加工段の造成の仕方はａ－ａ´地点及びｂ－ｂ´とほぼ同様である。各層の厚さは、第2黒色土層が厚いところで20cm、第1ハイカ層が130～180cm、そしてかなり削られてしまっているが、第1黒色土層が厚いところで110cm、加工段造成のための盛土が厚いところで70cmであった。一部で第3黒色土層を確認したが、湧き水等のため、調査は第2黒色土層までとした。

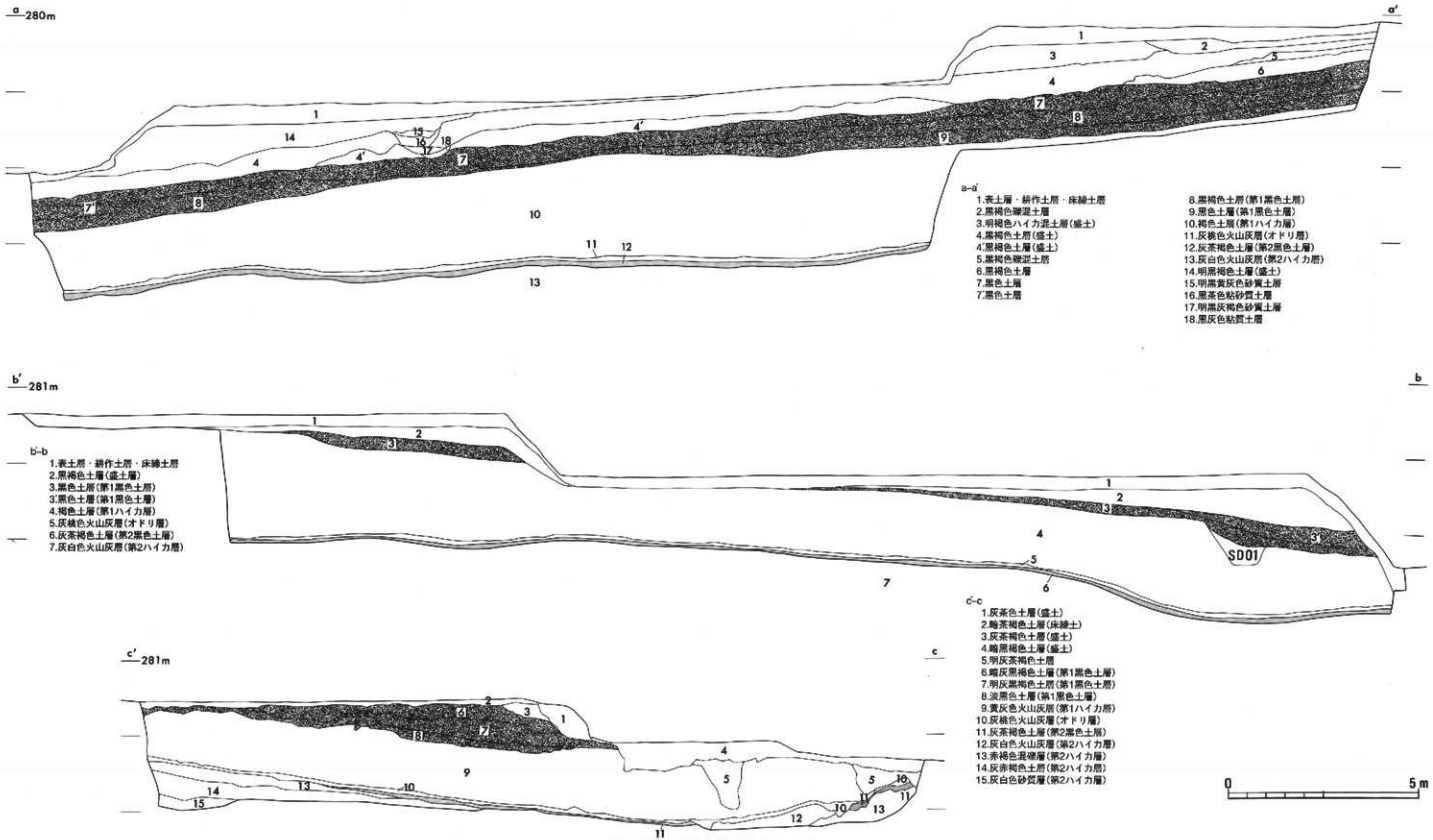
遺物及び遺構については、最も古いものは第2黒色土層中から検出した遺構群である。具体的には、2つの焼土面を囲むようにしてピットが並んでいた住居跡1（ＳＩ01）であり、それ以外には焼土面遺構を16カ所確認した。また遺物では縄文時代後期の磨消縄文土器や縁帯文土器をはじめ、細片ながら多量の粗製土器があり、石器では石鏃、石錐、石斧、磨石、十字型石器などが出土している。第1黒色土層中からは、縄文時代晩期の土器に始まり、石器、弥生土器、土師器、須恵器と続き、遺構も古墳時代後期と考えられる竪穴住居跡1（ＳＩ01）を検出している。その後しばらくは遺構及び遺物の空白期間となるが、室町時代になり、15世紀の青磁が出土しはじめる頃から遺物及び遺構がふたたび続くようになり、新しいところでは19世紀前半の肥前系磁器の碗蓋まで認められた。遺構では近世以降のものとして、掘立柱建物跡2（ＳＢ01・02）、集石土坑3（ＳＫ01・02・03）、神原Ⅰ・Ⅱ両遺跡にわたって掘られていた溝（ＳＤ01）、その他桶を据え付けていた跡と考えられる粘土貼土坑が多数検出されている。

2．遺構と遺物

(1) 第1黒色土層検出の遺構

ＳＩ01（第104図、図版25）

調査区東部で検出した竪穴住居跡である。平面形は、隅部の丸い形状をとり、遺存状況は、北東辺、北西辺が流出していた。規模は現状で長さ3.0m・幅3.0m・深さ0.25mで、床面には壁沿いに幅30cm、深さ5cmの溝が廻っている。柱穴はＰ.1～Ｐ.10の10穴が確認できたが、その内この住居跡に伴うものとみられるのはＰ.1～Ｐ.5の5穴と考えられる。これらは径0.25～0.35m・深さ0.35～0.5mでほぼ均等である。住居跡中央部に位置するＰ.6は、径0.55m・深さ0.95mと、前述の柱穴群と比較するとかなり深く、また上部から鉄滓が出土していることなどから、竪穴住居に伴う



第102図　2区土層断面図（1：100）

ものというよりも、図中破線で結んだP.7～P.10の柱穴と対応する可能性がある。P.7～P.9の3穴は、径0.45m・深さ0.5mではぼ均等、P.10は径0.4～0.7m・深さ0.5mである。また、P.6からは長さ70cm、径5cmの柱が立ったままの状態で出土した。住居跡内からの出土遺物はなく、時期の確定はできないが、周囲から出土した土師器片を参考にすると、古墳時代後期頃のものと推定される。

SB01（第105・106図、図版23）

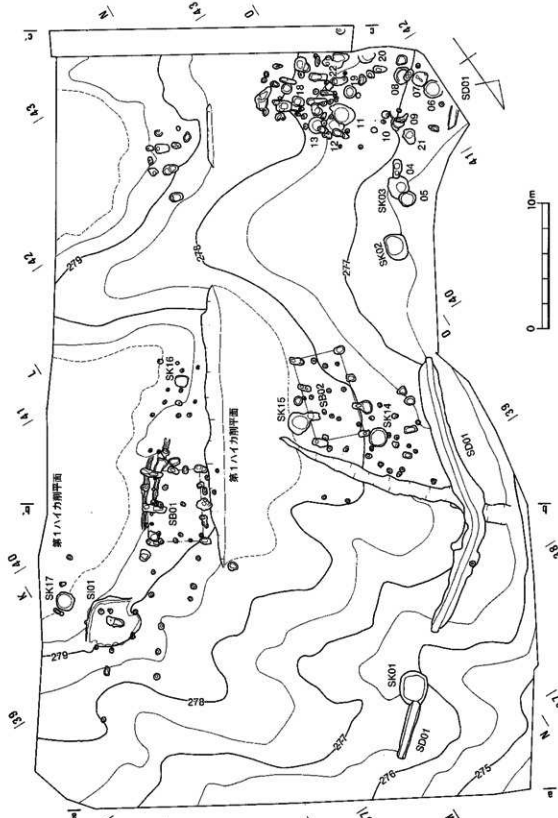
調査区東部中央寄りで検出した遺構で、SI01から南西10mに位置する掘立柱建物跡である。桁行はP.1－P.14・P.15－P.2－P.9－P.3とP.7－P.12－P.6－P.11－P.5、梁行はP.3－P.10－P.4－P.5とP.7－P.16－P.8－P.13－P.1で、4間×3～4間になるものと思われる。柱穴の心々間の距離は、桁行（P.1－P.3、P.7－P.5）が5.7m、梁行（P.3－P.5、P.7－P.1）が4.5mである。柱穴は、基柱となるP.1、P.2、P.3、P.5、P.6、P.7の6穴がいずれも斜面の低い側から高い側に向かって斜めに掘り込まれており、その一番低いところに柱が立てられていたものと考えられる。その6穴の寸法は、上端についてはP.1が径0.45～0.9m、P.2が径0.9～1.3m、P.3が径0.6～1.1m、P.5が径0.55～1.8m、P.6が径0.65～2.0m、P.7が径0.5～1.0mとそれぞれ大きくずれがあるが、下端についてはいずれも径0.3～0.65m、深さについても0.75～1.0mとほぼ同様の寸法であった。この遺構に伴う遺物は確認できなかったため、明確な時期は特定できないが、1区での調査例などを参考にすると、近世以降のものと考えられる。

SB02（第107・108図、図版23、24）

調査区中央部で検出した遺構で、SB01から西15mに位置する掘立柱建物跡である。桁行はP.1－P.2－P.3－P.4とP.5－P.6－P.7－P.8、梁行はP.4－P.5とP.8－P.1で、3間×1間になるものと思われる。柱穴の心々間の距離は、桁行（P.1－P.4、P.5－P.8）が7.0m、梁行（P.4－P.5、P.8－P.1）が3.8mである。柱穴は、斜面の高い側にあるP.5、P.6、P.7、P.8の4穴が、いずれも斜面の低い側から高い側に向かって斜めに掘り込まれており、その一番深いところに柱が立てられていたものと考えられる。それぞれの柱穴の寸法は、P.1が上端径0.45～0.9m・下端径0.3m、P.2が上端径0.45～1.6m・下端径0.25～0.5m、P.3が上端径0.5～0.8m・下端径0.35～0.45m、P.4が上端径0.55～0.85m・下端径0.5m、P.5が上端径0.5～1.2m・下端径0.25～0.4m、P.6が上端径0.4～1.1m・下端径0.3m、P.7が上端径0.65～1.0m・下端径0.45～0.6m、P.8が上端径0.55～1.3m・下端径0.25～0.35mである。これらの柱穴のうち、P.4を除くすべてから柱の抜き取り痕が確認できた。特にその痕跡が明瞭なP.1、P.5、P.7から推測すると、柱の径はおおむね0.2mで、黒灰色土層がこれに当たると考えられる。このSB02についても、遺構に伴う遺物が確認できなかったため、明確な時代は特定できないが、上記の例などから判断すると、やはりSB01同様、近世以降のものであるとみられる。

SK16とピット列（第109、125図）

調査区東部中央寄りで検出した遺構群である。SB01から南西10mに、円形の粘土貼土坑とその付随施設の柱穴と考えられるピット列からなる。規模は、長さ1.0m・幅0.9m・深さ0.48m。底面



第103図　2区第1ハイカ面遺構配置図（1：300）

には黄灰色粘土が厚さ3cmで貼られており、十層の堆積状況から推測すると、黒褐色土層が裏込め土であり、径0.85mの桶が据えられていたと考えられる。

SK16に付随する施設の柱穴と考えられるピット列が、P.1－P.2－P.3－P.4－P.5と、またそれに直交するP.6－P.5－P.7、P.9－P.2－P.8の2列の、以上の3列が確認できた。

これら遺構群に伴う遺物の出土はなかった。

SK01（第110図、図版26）

調査区北部で検出した遺構で、SB02から北々東25mに位置する長楕円形の集石土坑である。土坑の内部で火がたかれ、その中に多数の山石が投入されて焼石となったものである。規模は、長さ2.65m・幅2.15m・深さ0.55m。焼石は土坑上端面よりも外に、長さ3.0mの範囲にまであふれていた。焼石の下は、土坑の壁面が赤黄色く焼けており、北西壁に沿っては、折れてはいるものの長さ1.65mの木炭が認められた。またそれに直交する形で、北側から順に1.45m（復元すると）、1.5m、0.45mと、ちょうど「山」の字形に配された木炭が残っており、その周囲の底面にも広く炭が散らばっていた。この遺構に伴う遺物の出土はなかった。

SK02（第111図、図版27）

調査区西部で検出した遺構で、SB02から南西13mに位置する楕円形の集石土坑である。土坑の内部で火がたかれ、その中に多数の山石が投入されて焼石となったものである。規模は、長さ2.0m・幅1.7m・深さ0.55m。焼石は土坑上端面よりも外に、長さ2.4m・幅1.8mの範囲にまであふれていた。焼石の下は、土坑の壁面が赤黄色く焼け、北西壁に沿っては長さ1.0mと0.4mの木炭が交差するような形で残っており、その周囲の壁面から底面にかけても広く炭が散らばっていた。この遺構に伴う遺物の出土はなかった。

SK03（第112図、図版27、28）

調査区西部で検出した遺構で、SK02から南西5mに位置する、ほぼ円形の集石土坑である。土坑の内部で火がたかれ、その中に多数の山石が投入されて焼石となったものである。規模は、長さ1.9m・幅1.7m・深さ0.5m。焼石の下は、土坑の壁面が赤黄色く焼け、西壁に沿っては長さ0.75mの木炭が残っており、その周囲の壁面から底面にかけても広く炭が散らばっていた。この遺構に伴う遺物の出土はなかった。

SK04（第113図、図版27、28）

調査区西部で検出した遺構で、SK03の南西側に切り合って隣接する土坑である。上端は長細く、長さ1.55m・幅0.55mであり、下端は長さ0.3m・幅0.2m、深さは0.65mである。土坑内から遺物は出土せず、その性格も、その明確な時代も特定できないが、SK03を切っている状況から、SK03よりは新しい段階のものである。

SK05（第114図、図版27、28）

調査区西部で検出した遺構で、SK03の北側に切り合って隣接する円形の土坑である。径は1.25

第104図　2区SI01および周辺ピット群遺構実測図・同断面図（1：60）

m、深さは0.5mである。土層の堆積状況からすると、暗黒灰色土層が裏込め土であり、径1.0mの桶のようなものが据えられていたと考えられる。この遺構に伴う遺物の出土はなかった。

SK06（第115図、図版30）

調査区西部で検出した遺構で、SK03から南西8mに位置する円形の粘土貼土坑である。規模は、径1.45m・深さ0.6m。側面から底面にかけて黄灰色粘土が6～15cmの厚さで貼られており、土層の堆積状況から推測するとこれが裏込め土であり、径1.1mの桶のようなものが据えられていたと考えられる。このSK06の埋土最上層の茶褐色土層から鉄製品が1点出土しているが、流れ込みによるものとみられる。

SK07（第116図、図版30）

調査区西部で検出した遺構で、SK06の南側に隣接する円形の粘土貼土坑である。規模は、径1.75m・深さ0.45mである。土層の堆積状況をみると、裏込め土は、まず下部に暗灰色土を込め、その上に外側に黒灰色土を、内側に黄灰色粘土を込める手法をとる。そしてその中に径1.0mの桶のようなものが据えられていたと考えられる。このSK07の埋土最上層の茶褐色土層中からは、SK06と同様に、鉄製品が1点出土している。

SK08（第117図）

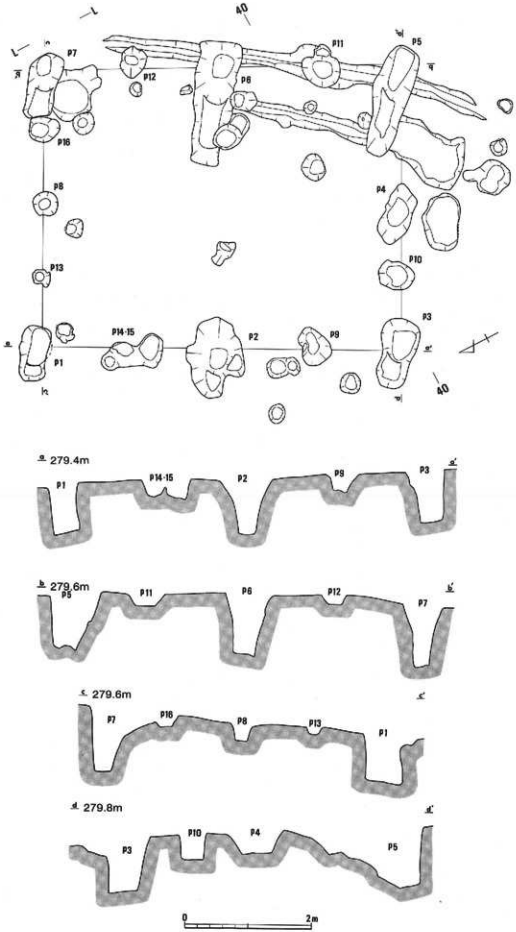
調査区西部で検出した遺構で、SK07の南東側に隣接するほぼ円形の粘土貼土坑である。規模は、径1.2～1.35m・深さ0.2m。土層の堆積状況をみると、裏込め土として、まず底面に黒褐色土を、その上に黄灰色粘土を込め、側面では外側に暗灰色土を、内側に黄灰色粘土を込めて、そしてその中に径1.0mの桶のようなものが据えられていたと考えられる。このSK08は後にP.1に切られている。そのP.1中から江戸時代の石見焼陶磁器小片が1点出土しており、近世の遺構と考えられる。

SK09（第118図、図版31）

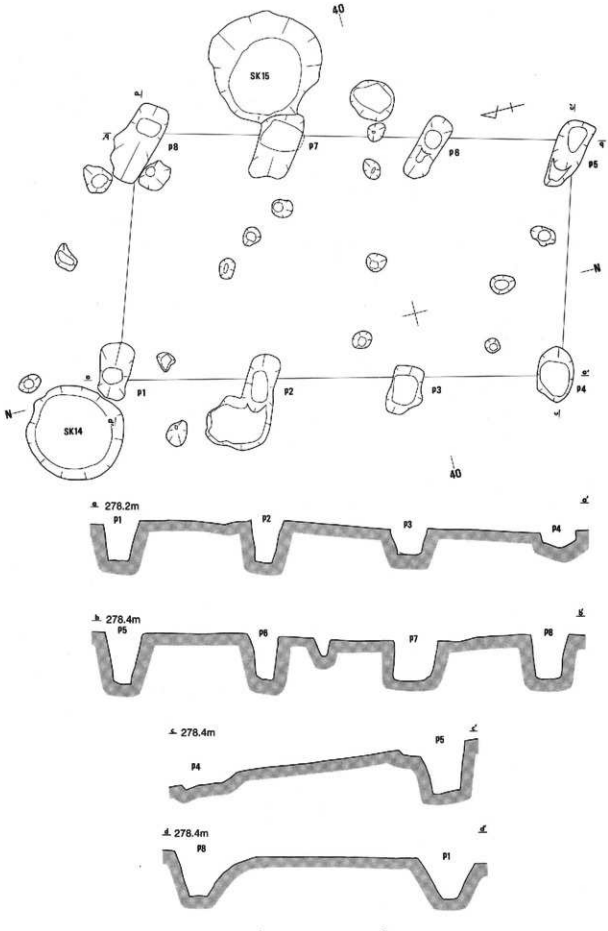
調査区西部で検出した遺構で、SK06の東3.5mに位置する円形の粘土貼土坑である。規模は、径1.4m・深さ0.45m。土層の堆積状況を観察してみると、裏込め土として、底面に黄灰色粘土を込め、側面では外側に黒色土を、内側に黄灰色粘土を込めて、そしてその中に径0.9mの桶のようなものが据えられていたと考えられる。このSK09は、後述のSK10を切って作られていることから、SK10よりは新しい粘土貼土坑であると言える。ただ、SK09、SK10いずれからも遺物は出土していない。

SK10（第119図、図版31）

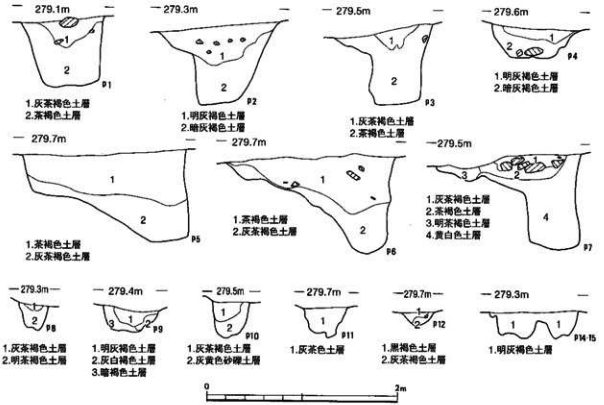
調査区西部で検出した遺構で、SK09の北側に切り合って隣接する粘土貼土坑である。前述のSK09に南側部分を切られ、また側壁もすべて失っているので、調査時点では既に底面の粘土面しか残っていなかった。裏込め土と考えられる厚さ3～5cmのこの黄灰色粘土面上には、径0.9mの桶と思われるものが置かれていた痕跡が残っていた。このSK10は、前述のSK09に切られているこ



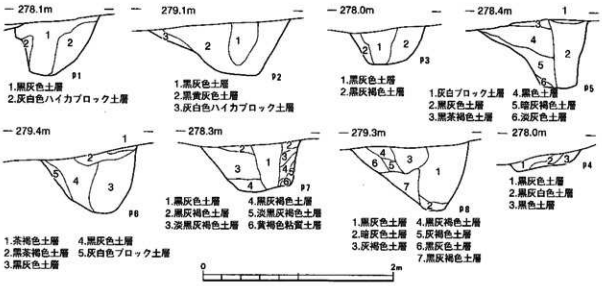
第105図　2区ＳＢ01遺構実測図・同断面図（１：60）



第106図　2区ＳＢ02遺構実測図・同断面図（1：60）



第107図　２区ＳＢ01柱穴土層断面図（１：40）



第108図　２区ＳＢ02柱穴土層断面図（１：40）

とから、ＳＫ09よりも古い粘土貼土坑である。ただ、ＳＫ09、ＳＫ10いずれからも遺物は出土していない。

ＳＫ11（第120図）

調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ10の南東５ｍに位置する、下端面は円形を呈した土坑である。規模は、上端は長さ1.8ｍ・幅1.5ｍ、下端は長さ1.1ｍ・1.25ｍ、深さは0.55～0.6ｍ。底面には、内径0.8ｍ・外径1.1ｍ・幅0.12～0.25ｍの溝が廻っており、溝の底までの深さとなると0.6～0.7ｍにな

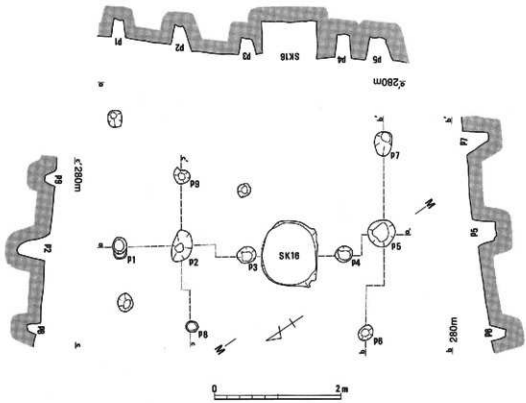
る。この溝が、据え付けられていた桶のようなものの底縁の痕跡と考えられる。この土坑の底面ないし側面に裏込め土としての粘土が貼られた痕跡はなく、少なくとも水溜め用に使われたとは考えにくい。用済みの後には土石が投げ込まれている。このＳＫ11からは、埋土最上層の黒色土層中から陶磁器の砕片が１点出土している。また、東壁が後述するＳＫ12によって切られていることから、ＳＫ12よりは古い遺構である。

ＳＫ12（第121図、図版31）

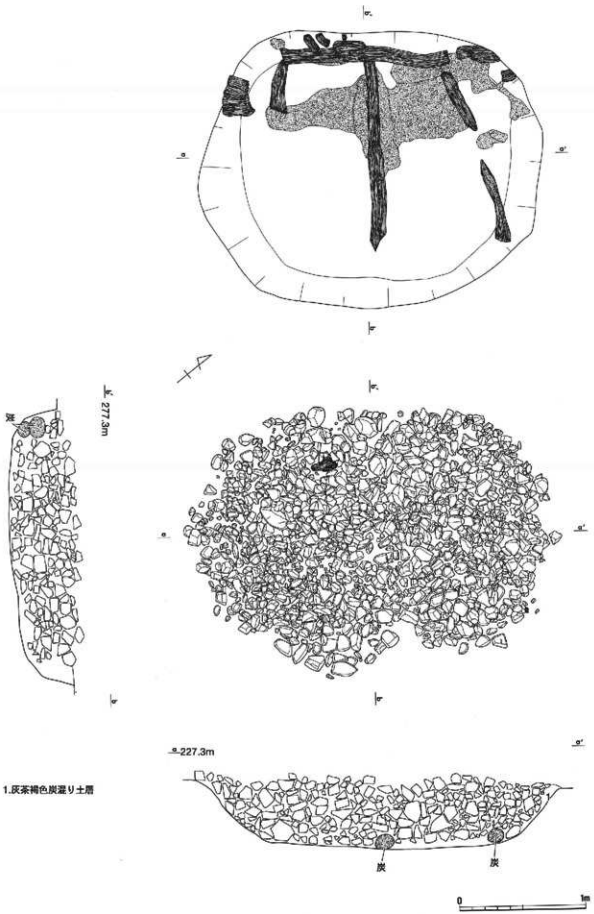
調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ11と切り合い関係にある円形の粘土貼土坑である。この土坑は、上端が径1.3～1.5ｍ、下端が径1.1ｍ、深さが0.5～0.55ｍである。底面から側面にかけて5～7㎝の厚さで黄茶色粘土が裏込めされており、その中に桶のようなものが据えられていたと考えられる。桶の底縁部分が溝状の痕跡として残っており、その寸法は内径0.9ｍ・外径1.0ｍ・幅5㎝・粘土上面からの深さは3～6㎝である。ＳＫ12に伴う遺物は出土しておらず、切られているピットからもない。ただ、切っているＳＫ11から陶磁器の細片が出土している。

ＳＫ13（第122図、図版31）

調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ12の東に隣接する円形の粘土貼土坑である。この土坑は、上端が径1.3～1.4ｍ、下端が1.1ｍ、深さが0.2～0.3ｍである。底面には６～９㎝の厚さで黄褐色粘土が貼られている。その粘土面上には、径0.9ｍ・深さ２～３㎝の円形の窪みがあり、桶のようなものが据え付けられていたと考えられる。遺構内からの遺物の出土はなかった。



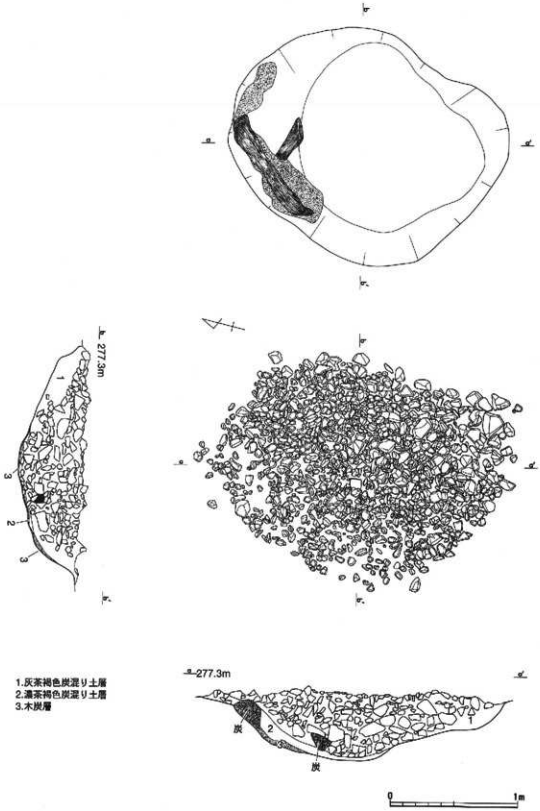
第109図　２区ＳＫ16周辺遺構実測図（１：60）



第110図　2区ＳＫ01遺構実測図（１：30）

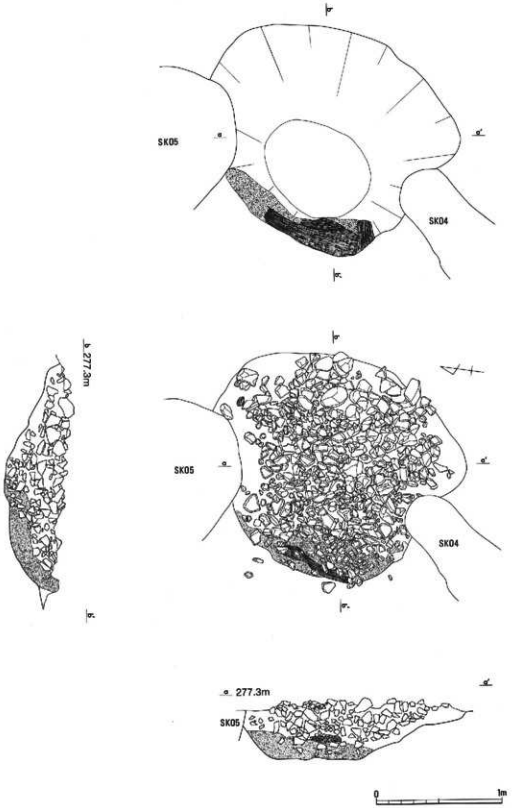
ＳＫ14（第123図、図版31）

調査区中央部で検出した遺構で、ＳＢ02の北側に隣接する円形の粘土貼土坑である。この土坑は、上端が径1.4～1.5ｍ、下端が1.1ｍ、深さが0.5～0.6ｍであり、底面には４～６㎝の厚さで黄灰色粘土が、側面には明褐色粘質土が裏込めされており、中に桶のようなものが据えられていたと考えら

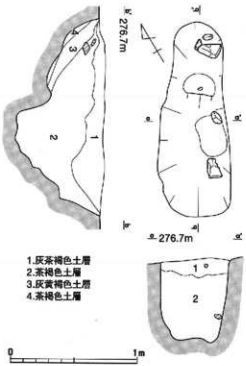


第111図　２区ＳＫ02遺構実測図（１：30）

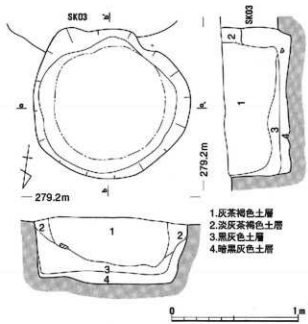
れる。桶の底縁部分が溝状の痕跡として残っており、その寸法は内径0.9ｍ・外径1.0ｍ・幅5～7㎝・粘土上面からの深さは３～４㎝である。この遺構から遺物の出土はなかった。



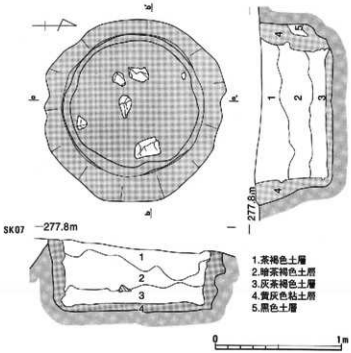
第112図　２区ＳＫ03遺構実測図（１：30）



第113図　２区ＳＫ04遺構実測図（１：30）



第114図　２区ＳＫ05遺構実測図（１：30）



第115図　２区ＳＫ06遺構実測図（１：30）

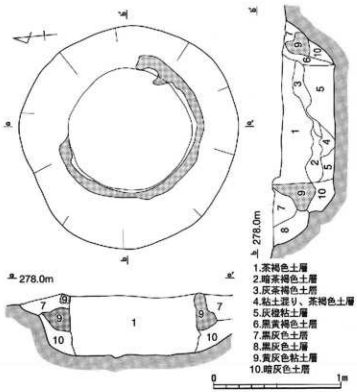
ＳＫ15（第124図、図版30）

調査区中央部で検出した遺構で、ＳＫ14の南東6.5ｍに位置する円形の粘土貼土坑である。この土坑は、上端が径1.5～1.7ｍ、下端が径1.1ｍ、深さが0.4ｍであり、底面には５～７㎝の厚さで黄灰色粘土が、西側側面には黒色土が裏込めされており、中に桶のようなものが据えられていたと考

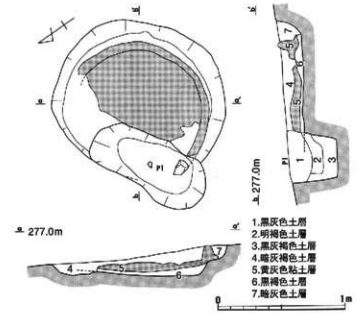
えられる。桶の底縁部分が溝状の痕跡として残っており、その寸法は内径0.85ｍ・外径1.0ｍ・幅６～８㎝・粘土上面からの深さは２～３㎝である。このＳＫ15は、前述のＳＢ02のＰ.７に切られていることから、ＳＢ02よりも古い粘土貼土坑である。ただ、ＳＢ02、ＳＫ15いずれからも遺物は出土していないことから明確な時代は特定できない。

ＳＫ17（第126図、図版29）

調査区東部で検出した遺構で、ＳＩ01から南東４ｍに位置する円形の粘土貼土坑である。この土坑は、上端が径1.4ｍ、下端が径1.1ｍ、深さが0.4～0.45ｍであり、底面には径0.85ｍの円形状に２～６㎝の厚さで黄灰色粘土が貼られており、土坑の下端と粘土外径の間の溝が、据え付けられていた桶のようなものの底縁部分の痕跡だと考えられる。また、堆積土層の中の灰茶褐色土が側面の裏込め土に当たると思われる。この土坑は、用済みの後土石が投げ込まれたものと思われる。この遺構から遺物の出土はなかった。



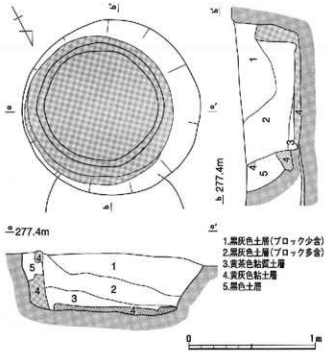
第116図　２区ＳＫ07遺構実測図（１：30）



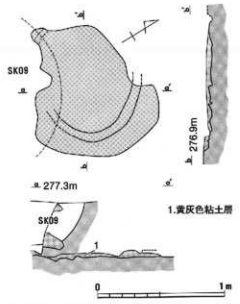
第117図　２区ＳＫ08遺構実測図（１：30）

ＳＫ18（第127図）

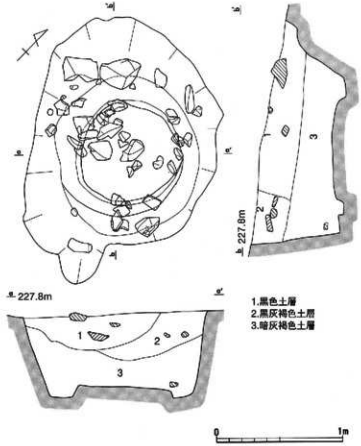
調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ13の南3.5ｍに位置する円形の粘土貼土坑である。この土坑は、上端が径0.9ｍ、下端が径0.6ｍ、深さが0.2～0.3ｍであり、底面から側面にかけて４～９㎝の厚さで黄灰色粘土が裏込めされており、その中に径0.4ｍの桶のようなものが据えられていたと考えられる。この遺構から遺物の出土はなかった。



第118図　2区ＳＫ09遺構実測図（１：30）



第119図　2区ＳＫ10遺構実測図（１：30）



第120図　2区ＳＫ11遺構実測図（１：30）

ＳＫ19（第128図、図版29）

調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ11の南西２ｍに位置する若干不整な円形をした土坑である。

規模は、上端径1.1～1.25ｍ・下端径0.75ｍ・深さ0.4～0.5ｍである。底面より上0.1ｍの地点では、幅７㎝の粘土筋が曲線状に0.3ｍの長さほど確認できた。この土坑は用済みの後、土石でもって埋められている。その埋土中から舟形器台の土師器片（図版55の136-11）の一部が出土したが、混入とみられる。他の遺物の出土はみられず、明確な時代は特定できない。また、粘土筋についても小範囲にしか残っていないため、他の多くの粘土貼土坑と同様のものであるとまでは断定できない。

ＳＫ20（第129図）

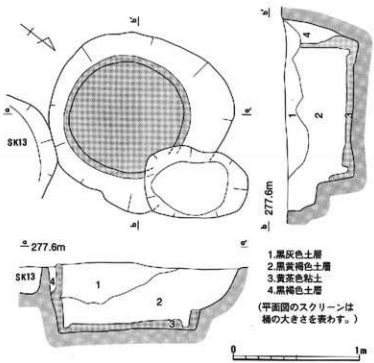
調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ19の南西３ｍに位置する楕円形を呈した土坑である。規模は、上端の長さ1.15ｍ、下端の長さ0.9ｍ、深さ0.45ｍである（幅は不明）。下端に沿うようにして方形状に石が配列され、その裏込めに黄灰色粘土が貼られている。この土坑内から遺物の出土はみられなかった。

ＳＫ21（第130図）

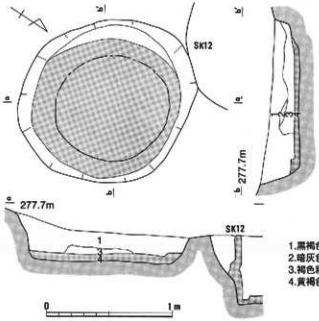
調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ20の北７ｍに位置する長楕円形の粘土貼土坑である。規模は、長さ1.05ｍ・幅0.7ｍ・深さ５～15㎝。土坑内は、中央部（長さ0.55ｍ・幅0.35ｍ）の僅かに炭を含む暗褐色土が堆積している部分を除いては、側面いっぱいまで黄灰色粘土が貼られている。この土坑内から遺物の出土はみられなかった。

ＳＫ22（第131図）

調査区西部で検出した遺構で、ＳＫ19の南東２ｍに位置する粘土面である。この粘土面は、およそ0.65ｍ四方の不



第121図　２区ＳＫ12遺構実測図（１：30）

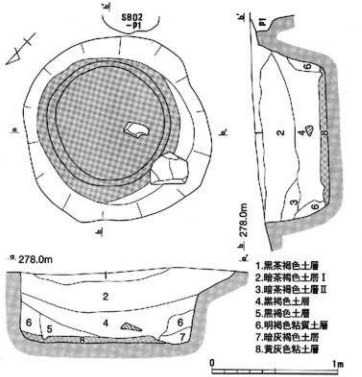


第122図　２区ＳＫ13遺構実測図（１：30）

整な方形状に、厚さ4～9㎝ほどの黄灰色粘土が広がっている。遺構に伴う遺物はなく、明確な時代は特定できないが、周辺の他の粘土貼土坑と粘土が同質の黄灰色粘土であることなどから判断すると、これも近世以降のものであると考えられる。

ＳＤ01（第132図）

ＳＤ01は、神原Ⅰ遺跡Ａ区から当神原Ⅱ遺跡１区・２区を通して流れていた溝の跡である。２区における残存状況が良好であったため、ここで遺構の様子を記載する。ａ－ａ´地点での断面からは、上幅1.25ｍ・下幅0.5ｍ・深さ0.6ｍのＶベルト状の溝であったことが分かり、土層の堆積状況をみると、流れが淀んでいたと思われる粘質土層と、流れによって堆積したと思われる砂質土層が交互に堆積していることが分かる。また、暗褐色粘砂質土が堆積して一旦埋まりかけた溝を、その後で改めて掘り直して利用したような痕跡も見受けられる。この溝の底面の標高は、神原Ⅰ遺跡Ａ区では276.4ｍ、神原Ⅱ遺跡では１区地点も２区地点も276.3ｍであり、南から北へとわずかに傾斜していることが分かる。

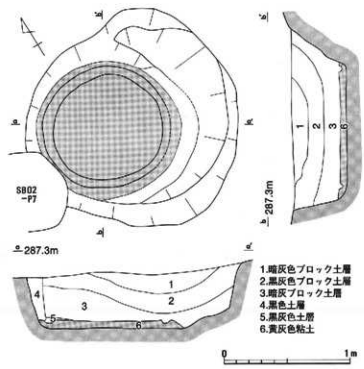


第123図　２区ＳＫ14遺構実測図（１：30）

⑵　第１黒色土層出土の遺物

縄文土器（第133図、図版46）

縄文土器は、粗製土器を中心に少量出土している。ここでは７点を図示した。１は波状口縁の浅鉢で、調整は内外面ともミガキで、内面端部に一条の沈線が入る。また、両面から穿孔された孔を有する。２は調整は内外面ともナデで、外面には楕円状の連続刺突文が施されている。３



第124図　２区ＳＫ15遺構実測図（１：30）

・4は調整は内外面ともミガキで、外面には水平方向や斜め方向に1条～3条の沈線がみられる。5は方形の突起のある破片で、調整は外面はミガキで、内面は横方向のナデである。突起部には、平坦面にヘラによる少なくとも8条の沈線が、また、付け根部分にも2条の平行沈線と羽状の沈線が認められる。6・7は粗製の深鉢とみられる破片で、ともに外面にススが付着する。6は口縁部を残し、調整は外面が粗いナデ、内面がナデである。7の調整は外面がナデ、内面が丁寧なナデである。

石器類（第134図、図版65）

第1黒色土層からの石器の出土量は少なく、叩石1点、石斧1点、砥石2点が確認されたに過ぎない。1は丸味のある偏平な叩石で、両端部に敲打した痕跡が認められる。長さ13.8cm、最大幅7.2cm、最大厚3.15cm、重量530.63gである。

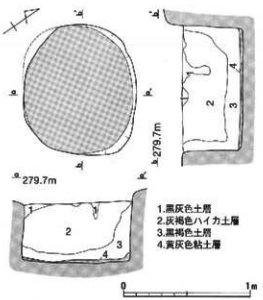
2は偏平な打製石斧で、使用痕跡は顕著ではない。長さ7.7cm、最大幅6.5cm、最大厚1.5cm、重量78.75gである。

3・4は砥石である。3は両平坦面と一側面との三面が使用されており、このうちの一面には明瞭な筋状の擦痕が認められる。長さ9.6cm、最大幅7.2cm、最大厚3.2cm、重量は298.18gである。4は、隣り合う二つの平坦面を使用している。長さ11.3cm、最大幅8.1cm、最大厚8.75cmほどであり、重量は1.56kgである。

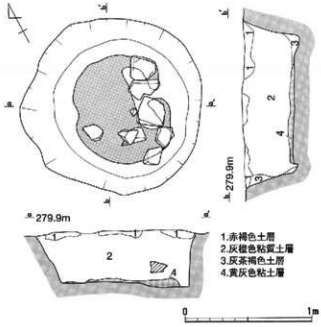
石材は、1が石英斑岩または流紋岩質の結晶質凝灰岩、2が無斑晶質安山岩、4が安山岩質の凝灰岩とみられ、3は石英安山岩の可能性がある。

これらの時期は、遺構に伴わないため、不明である。

弥生土器（第135～137図のうち、図版56・55）

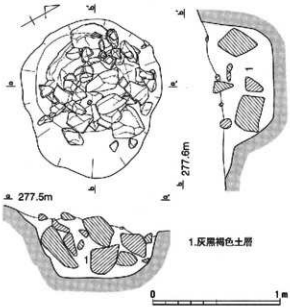


第125図　2区ＳＫ16遺構実測図（1：30）

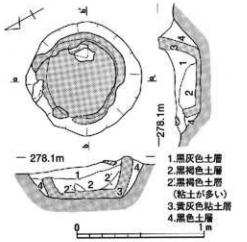


第126図　2区ＳＫ17遺構実測図（1：30）

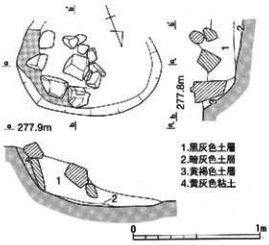
135図はすべて中期のものである。1～5は壺の胴部である。1～2は内面にハケ目調整と、外面に波状文と沈線を有する。2にはさらに円形浮文もみられる。3～5は綾杉文を有し、3・4には沈線文も加わる。6は鉢か高杯の杯部と思われ、内面にナデ調整、外面に刻目文と沈線がみられる。7～9・13～16は高杯の杯部である。7は内外面にハケ目調整、口唇外面に刻目文がみられる。8は内面にナデと横ナデによる調整、口縁と外面に沈線、外面にミガキ調整がみられる。9は内外面にミガキと横ナデによる調整、口縁に円形浮文と刻目文がみられる。13～14は小片で、13は内面にナデ調整、口縁に円形浮文と波状文、外面にナデ調整がみられる。14は内外面に横ナデ調整、口縁に波状文がみられる。15は内面にミガキ、内外面に横ナデによる調整、口縁に斜格子文がみられる。16は内外面にナデ調整、口縁に斜格子文と円形浮文、外面に横ナデ調整がみられる。10・12は



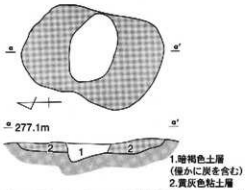
第127図　2区ＳＫ19遺構実測図（1：30）



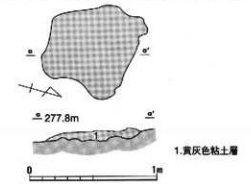
第129図　2区ＳＫ18遺構実測図（1：30）



第128図　2区ＳＫ20遺構実測図（1：30）



第130図　2区ＳＫ21遺構実測図（1：30）

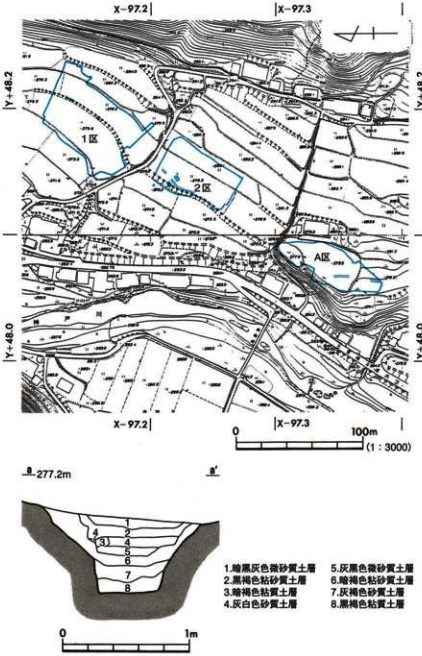


第131図　2区ＳＫ22遺構実測図（1：30）

高坏の脚部である。10は、内面はケズリ後ナデ、端部は横ナデ、外面はナデによる調整が見られる。12は内面にナデとケズリ、端部にナデ、外面にハケ目による調整と沈線がみられる。11は高坏の頸部（脚上部）に当たり、内面にケズリ調整、外面に沈線と円孔がみられる。

136図は1～4・6～7は中期の甕である。1・6～7は貼り付け突帯に刻目文が施されたもので、6は口縁に凹線を有する。2～4は主に横ナデとハケ目による調整がなされたもので、4は頸部の屈曲が強い。5は壺の可能性があり、頸部に貼り付け突帯に刻目文が施されている。8は甕で、内面にケズリ調整、口縁に凹線が施され、中期末から後期のものの可能性がある。

137図はすべてやや上げ底気味の底部である。主な調整はミガキとナデである。



第132図　2区ＳＤ01・02遺構断面図（1：30）

土師器（第136図のうち、図版55）

9～11は弥生時代終末期の土器と考えられる。9～10は甕で、主な調整は横ナデとヘラケズリで、10には櫛状工具によるハケ目がみられる。11は鼓形器台の脚台部で、内面にミガキとヘラケズリ、外面に横ナデがみられる。

陶磁器類（第34・35図のうち、図版59・60のうち）

近世の陶磁器類は、ここでは18点図示した（1、3～5、7～9、12～15、17～23）。1・3・4・7・8は陶胎染付の雑器類で、（1と3は呉須また鉄釉の上薬がかかる）碗である。17世紀後葉～18世紀前葉のものとみられる。5は陶器の碗で、内外面ともに淡白灰色の釉がかかる。17世紀後葉～18世紀前葉とみられる。9は肥前系の碗で、外面に網代文様を描いている。1650～70年代のものとみられる。12は肥前系の皿で、内面は白磁釉に染付絵、見込みに印花紋、外面は淡青磁釉がかかり、底面に福の字の書印を記している。18世紀前半～中葉のものとみられる。13は有田の碗で、18世紀後半の前後と見られる。14は有田の碗で、17世紀後葉～18世紀前葉と見られる。15は波佐見産かと見られる皿で、内面見込みに印花紋があり、その周囲は蛇の目状に釉のカキ落としがみられる。18世紀前半～中葉とみられる。17は型打成形による菊花形の皿で、高台畳付の部分以外は淡青磁釉がかかる。1630～40年代のものとみられる。18は肥前系の仏飯器で、波佐見産の可能性がある。18世紀後半のものとみられる。19・20は肥前系の小坏で、17世紀後葉～18世紀前葉とみられる。21は、肥前系の碗の蓋で、19世紀前半のものとみられる。22・23は肥前系の陶器碗で、高台まわりはヘラ切り、底部外面はヘラケズリが施されている。ともに1600～30年代のものと見られる。

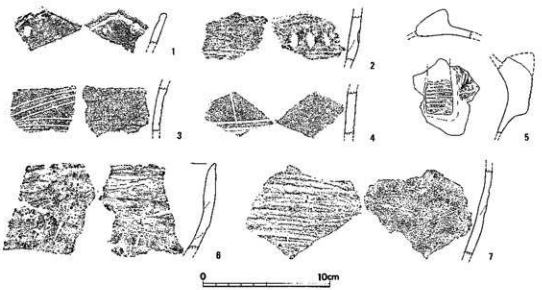
(3) 第2黒色土層検出の遺構

ＳＩ01・焼土面6・焼土面7（第139図、図版34）

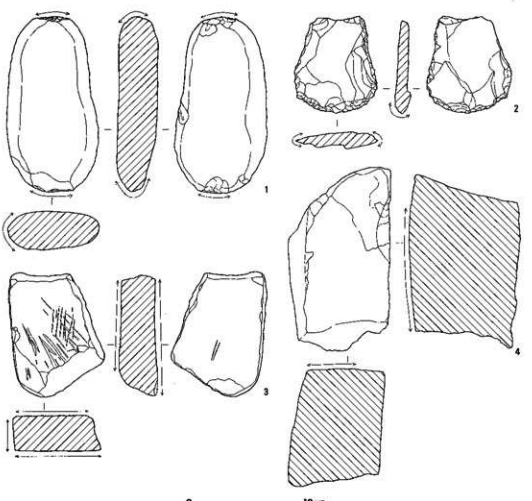
ＳＩ01は調査区中央部、東壁に沿って検出した住居跡と考えられる遺構である。遺構としては、焼土面6・7を取り囲むように「コ」の字形に並んだ柱穴列が検出できた。その並びは、焼土面西側のＰ.2－Ｐ.4の南北列、焼土面北側のＰ.2－Ｐ.6の東西列、焼土面東側のＰ.5－Ｐ.10の南北列である。柱穴中、径の最大のものはＰ.7（上端23～32cm・下端9～19cm）で、あとはほぼ上端径15cm・下端径7cmといったところであり、深さについては10～27cmとなっている。焼土面の規模はそれぞれ、焼土面6が残存長さ60cm・幅58cm・厚さ5cm、焼土面7が長さ80cm・幅73cm・厚さ11cmで、これらは住居跡内に設けられた炉の跡ではないかと考えられる。焼土面7の下からは2基のピットを検出できた。その内、Ｐ.1の規模は比較的大きく、上端径40cm・下端径25cm・深さ16cmである。遺物については、焼土面7の中から粗製土器の細片が19点出土した。

ＳＫ01・ＳＫ02（第140図、図版34）

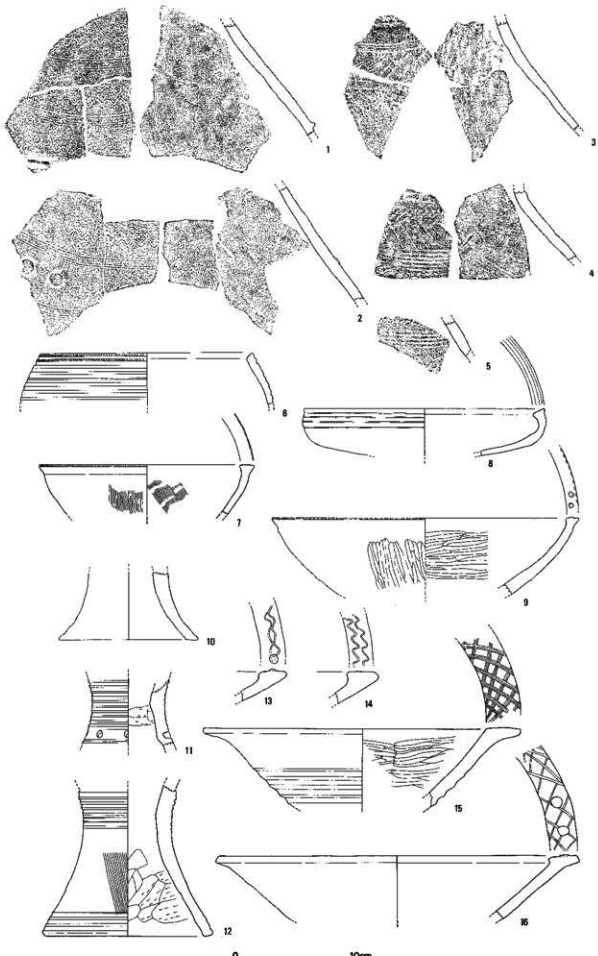
調査区中央部で遺構で、ＳＩ01の西10ｍに位置する土抗群である。規模は、ＳＫ01が上端径0.55～0.65ｍ・下端径0.35ｍ・深さ0.4ｍ、ＳＫ02が上端径0.75ｍ・下端径0.6ｍ・深さ0.25ｍである。遺物については、両土坑から土器の砕片がいくつか出土しており、その中で器種の判明したものはいずれも浅鉢だった（ＳＫ01からの出土分は第146図4・7、図版50）、（ＳＫ02からのは第144図15、図版48）。



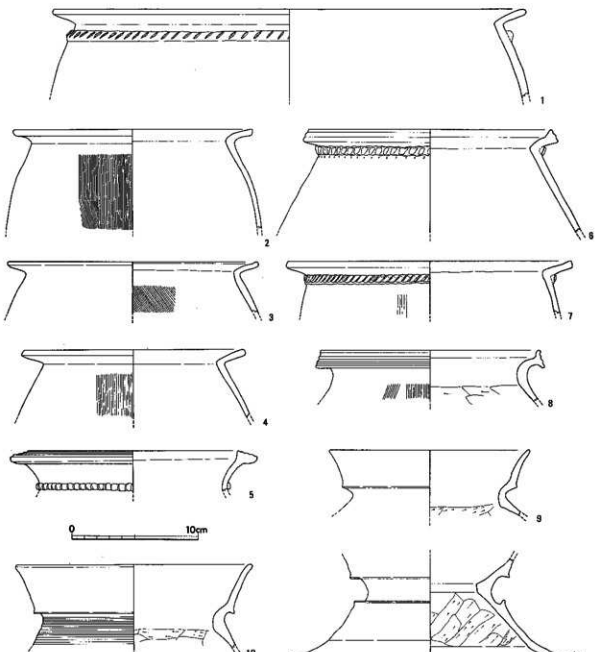
第133図　2区第1黒色土層出土縄文土器実測図（1：3）



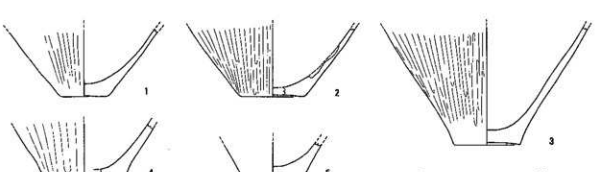
第134図　2区第1黒色土層出土石器実測図（1：3）



第135図　2区出土弥生土器実測図（1）（1：3）



第136図　2区出土弥生土器（2）・土師器実測図（1：3）



第137図　2区出土弥生土器実測図（3）（1：3）

焼土面１～18（第141図、図版35）

焼土面１は、調査区中央部で検出した遺構で、ＳＫ01の北９ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ90cm・幅55cm・厚さ14cm。遺物については、粗製土器の破片が２点出土した。

焼土面２は、調査区中央部、焼土面１の南２ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ120cm・幅65cm・厚さ７cm。遺物については、粗製土器の破片が８点出土した。

焼土面３は、調査区中央部、焼土面２の南５ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ30cm・幅25cm・厚さ３cm。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面４は、調査区中央部、焼土面３の西１ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ75cm・幅55cm・厚さ５cm。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面５は、調査区中央部、焼土面４の南２ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ150cm・幅85cm・厚さ20cm。遺物については、粗製土器の破片が26点出土した。

焼土面８は、調査区中央部東寄り、焼土面５の東北東13ｍに位置する焼土面である。 規模は、長さ75cm・幅60cm・厚さ８cm。遺物については、粗製土器の破片が1点出土した。

焼土面９は、調査区中央部東寄り、焼土面８の西1.5ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ110cm・幅90cm・厚さ８cm。遺物については、粗製土器の破片が９点出土した。

焼土面10は、調査区中央部東寄り、焼土面９の南1.5ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ70cm・幅55cm・厚さ６cm。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面11は、調査区中央部東寄り、焼土面10の北東２ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ35cm・幅30cm・厚さ３cm。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面12は、調査区中央部北寄り、焼土面11の北々西９ｍに位置する焼土面である。破壊されていて半分しか残されていないが、推定で規模は、長さ55cm・幅40cm・厚さ９cmになると思われる。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面13は、調査区中央部北寄り、焼土面12の西4.5ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ60cm・幅45cm・厚さ６cm。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面14は、調査区中央部、焼土面13の南４ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ70cm・幅50cm・厚さ７cm。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面15は、調査区中央部、焼土面14の南東１ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ85cm・幅50cm・厚さ15cm。遺物については、粗製土器の細片が３点出土した。

焼土面16は、調査区中央部北寄り、焼土面15の北東10.5ｍ、焼土面12の北東４ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ50cm・幅45cm・厚さ５cm。遺物については、粗製土器の細片が２点出土した。

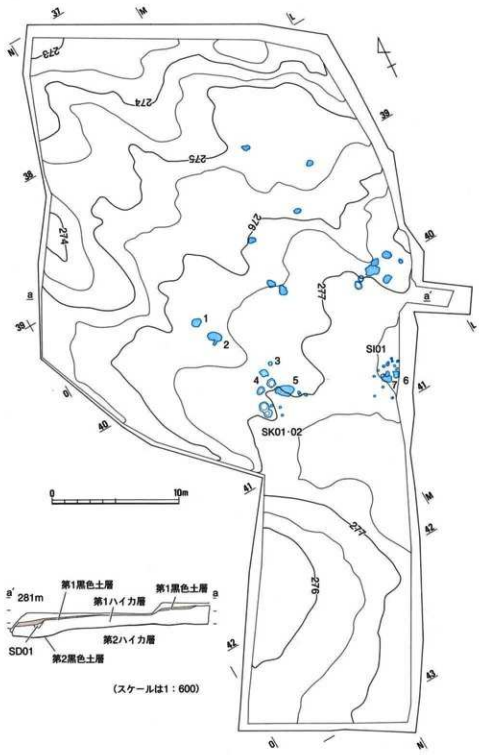
焼土面17は、調査区中央部北寄り、焼土面16の北西５ｍに位置する焼土面である。規模は、長さ67cm・幅36cm・厚さ８cm。遺構に伴う遺物は出土していない。

焼土面18は、調査区中央部東寄り、焼土面９に隣接する焼土面である。規模は、長さ80cm・幅55cm・厚さ12cm。遺物については、有文土器の細片が１点（第143図19、図版47）、粗製土器の細片が９点出土した。

(4) 第２黒色土層出土の遺物

第２黒色土層からは、小片がほとんどであるが、多量の縄文土器片と石器類が出土した。

第142図は、この第２黒色土層から出土した遺物の出土分布を表したものである。これをみると、縄文土器は、調査区の中央から北側にかけて広く分布し、谷地形を思わせる南側では出土量が少ない。さらに、北側では、ほぼ中央の緩やかな微尾根部分と、北東側壁に沿った緩やかな斜面にかなり濃密に分布していることが分かる。また、石器類についても、縄文土器とほぼ同じような、分布状況を表していて、二つの範囲に集中する傾向が読み取れる。そして、これは先の焼土面の分布範

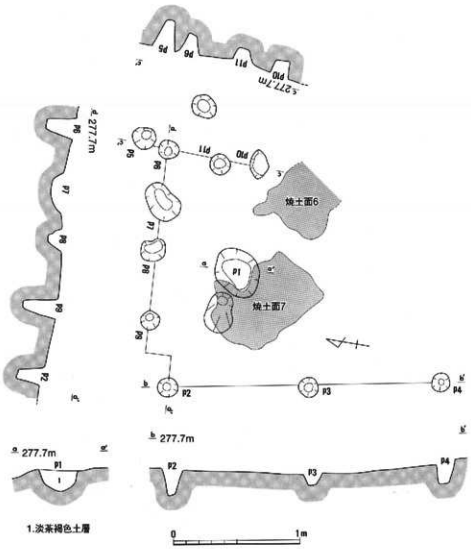


第138図　２区第２ハイカ面検出遺構配置図（１：300）

囲とも重なりあうことから、両者は近い関係にあったことも推察される。

縄文土器（第143～153図、図版47～52）

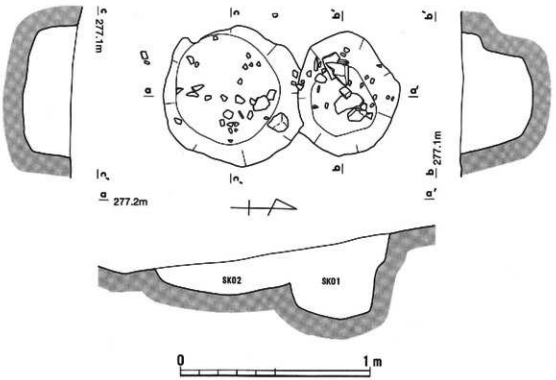
143図はすべて有文の深鉢である。2～6・8は、同一個体と思われる。口縁部は肥厚し、頸部との境は段をもつ磨消縄文土器である。口縁は太い直線的な沈線で、頸部以下は中央に押し引き状沈線をもつ楕円形と糸巻状のモチーフを交互に配す。また、底部は上げ底になっている。調整は、2～4・6・8の内面はナデで、5はナデとヘラ状工具による押さえぎみのナデである。7は沈線間に円形刺突が施され、9は大き目の凹点文が特徴である。13には半円形の文様が施されている。調整は、7の内面は二枚貝による条痕、9の外面はナデ、10の内面は条痕後ナデで外面はナデ、13の内面は条痕後ナデと条痕で外面はナデである。11～12・16～17は頸部が屈曲し、口縁部が内湾する器形である。これらは口縁部全面に縄文を施し、沈線で文様を描く。12は磨消縄文で、三角状の文様が施されている。調整は、11は内面と外面はナデで、口唇は面取りぎみのナデである。また、補修孔がみられる。12は内外面ともミガキとナデである。16は内面はナデと二枚貝による条痕後軽



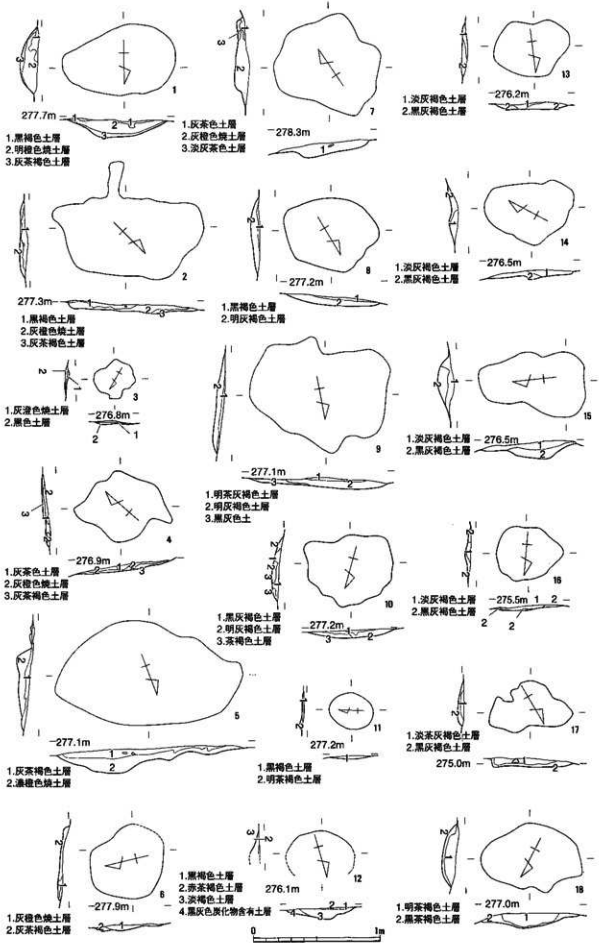
第139図　2区第2ハイカ面S101遺構実測図（1：30）

いナデで、外面はナデである。17は内面はナデである。18～19は三角形状と渦巻状の沈線が施されている。調整は、内面は二枚貝による条痕で、18の外面はナデ、19の外面は粗いミガキである。20～21・23は磨消縄文土器であるが、文様は不明である。調整は、20の内面は二枚貝による条痕、21の内面はナデ、23の内面はナデと二枚貝による条痕で、外面はナデである。1・14～15は口縁部片である。1は内外面はナデによる調整がされ、口唇に竹管状の工具による刺突文と、外面に細沈線が施されている。14は内面に二枚貝による条痕、内外面にナデによる調整がされ、外面に沈線が施されている。15は内面に二枚貝による条痕、内外面にナデによる調整がされ、外面に沈線が施されている。22は体部片で、調整は内面は二枚貝による横位と斜位の条痕、外面はナデである。また、外面には凹線が施されている。

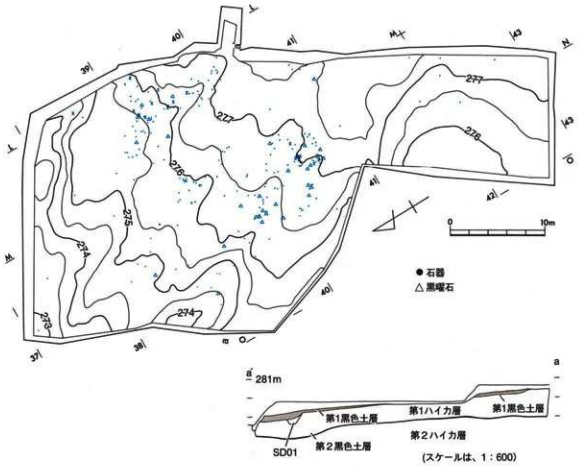
144図は有文の深鉢と浅鉢である。1～2・4～9・12～14は深鉢で、1～2・4～8は口縁部片である。1は内外面にナデによる調整がされ、外面に凹線が施されている。2は内面から口唇にナデ、内面に二枚貝による条痕、外面に条痕による調整がされている。4・8は同一個体とも思われ、内面は二枚貝による条痕、口唇はナデ、外面はナデもしくはミガキによる調整がされている可能性があり、また、口唇は縄文、外面は縄文と沈線が施されている。5は内外面にナデによる調整がされ、外面に縄文と沈線が施されている。6は内面に二枚貝の条痕と、口唇にナデによる調整がされ、外面に沈線と縄文が施されている。7は内面に二枚貝による条痕と、口唇にナデによる調整がされ、外面にナデによる調整がされた後、磨消縄文が施されている。9は内面にナデによる調整、口唇に縄文、外面に縄文と粗いミガキと沈線が施されている。12は内面はケズリとナデ、外面はミガキによる調整がされ、外面には沈線・縄文が施されている。13は波状口縁で、内面はミガキによる調整がされ、外面は縄文と沈線が施されている。14は双耳壺土器で、調整は内外面と突起部はミガキである。また、突起部はミガキとL.R撚りの縄文と沈線が施されている。

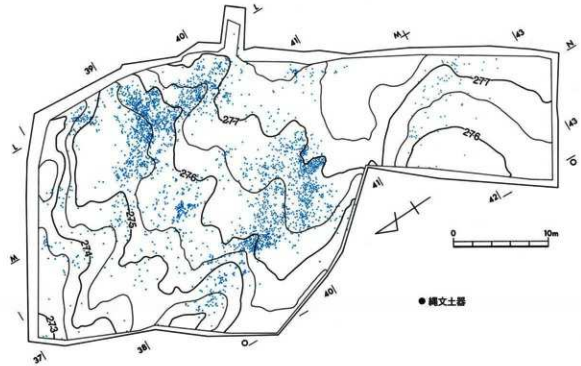


第140図　2区第2ハイカ面SK01・02遺構実測図（1：20）



第141図　2区第2黒色土層焼土面実測図（1：30）





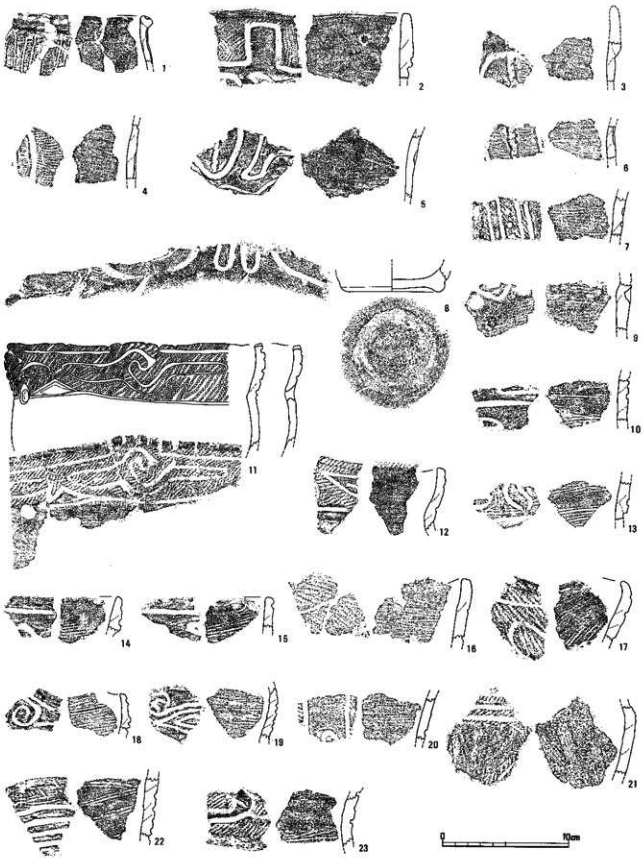
第142図　2区第2黒色土層遺物出土分布図（1：400）

10・11・15～17は浅鉢で、うち4・8・10～11・15は口縁部片である。10は内外面にミガキによる調整がされ、内面に沈線と刺突が施されている。11は内外面にナデによる調整がされ、口唇に縄文と沈線が施されている。15は内外面ともに粗いミガキによる調整がされている。16～17は浅鉢の体部片である。16は内外面ミガキによる調整がされ、外面に刻目が施されている。17は内外面にミガキと、外面にナデによる調整がされ、外面には沈線が施されている。3は鉢で、内外面にミガキによる調整がされ、外面に沈線が施されている。

145図の1～20・25は縁帯文土器で、1～4の口縁部は上面施文、他は外面施文である。突起部は11が同心円文で、他が入り組み文である。1は内外面はミガキ、口唇はミガキとナデによる調整がされ、口唇には縄文が施されている。2は内外面はナデによる調整がされ、口唇外面には縄文と沈線が施されている。3は内外面はナデによる調整がされ、外面には刺突文が施されている。4は内面と外面の一部にはナデによる調整がされ、口唇には縄文と沈線、外面には縄文が施されている。5は内面はナデとミガキ、外面の一部には縄文と沈線が施されている。6は内面と外面の一部はミガキによる調整がされ、口唇外面には縄文と沈線が施されている。7は内面と外面の一部はナデで、外面には沈線と縄文が施されている。8は内外面はナデ、口唇はミガキによる調整がされている。9は内面はナデ、外面はヘラ状工具による押さえぎみのナデによる調整がされ、口唇に縄文と沈線が施されている。10と11は調整はナデで、口唇外面から外面にかけ縄文と沈線が施されている。12は調整はナデで、口唇から外面に棒状工具による刺突が施されている。13は内面はミガキによる調整がされ、口唇外面から外面には沈線と縄文が施され、外側から穿孔されている。15は内面はナデによる調整がされ、沈線が施されている。外面は縄文と沈線が施され、穿孔されている可能性がある。19は内面はナデによる調整がされ、外面は沈線と縄文が施されている。16～18・20は口縁端部は外側に屈曲し、口縁屈曲部と肩部に明瞭な段がつき、また胴部には縄文が施されている。調整は、16は内面はナデとミガキ、外面はナデと横位のミガキである。17.18はミガキである。20は口縁部と思われるが小片で、口唇に縄文が施され、調整はミガキである。

21.22は浅鉢で、外面に縄文が施される。また、口縁内面には段がつく。調整は、21はミガキで、22は内面はナデとミガキで、外面は粗いミガキである。23.25.26は口縁部が屈曲する外面施紋の浅鉢である。23.25の屈曲部には刻目、25の口縁突起部には複合鋸歯状に沈線文が施される。調整は、23.25はミガキで、26はナデである。24は浅鉢の口縁部片で、内面から口唇にかけミガキによる調整がされ、外面には縄文が施されている。27は粗製深鉢で、口縁内面には指押圧痕が顕著である。調整はナデで、外面には粘土ひもの継ぎ目が見られる。

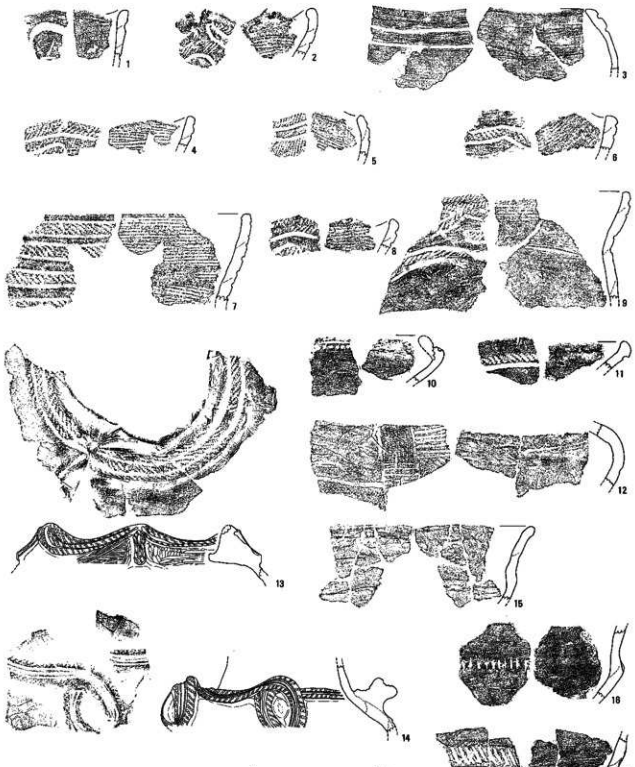
146図はすべて浅鉢である。1～5.11は胴部は屈曲して稜がつき、口縁部は外反する。調整は、1は内面はナデ後粗い横方向のミガキ、外面は横方向の丁寧なミガキである。2～4は口縁部片である。調整は、2の内面は横方向のミガキで、外面は横方向のナデと縦方向のやや粗いナデである。3は横方向の丁寧なミガキである。4は内面はナデで、また内面の一部と外面は横方向のやや粗いナデである。5は横方向の丁寧なミガキである。11は内面から外面にかけ横方向のミガキ、外面は横方向のやや粗いミガキである。6～10.13～14は口縁部が内湾するボウル形の浅鉢である。調整は、6・7・9は横方向の丁寧なミガキである。8は内面は横方向のケズリ後ナデで、口唇から外面は丁寧なナデである。10は丁寧なミガキである。13は内面から口唇にかけてナデで、外面は粗いナデである。また、両面穿孔されている。14は内面は横方向のやや粗いミガキで、外面は横方向の



第143図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図（1）（1：3）

ミガキである。12は底部で、調整はミガキである。2・8・10～11の外面と13の内外面にはススが付着していることもつけ加えておく。

147図は1～8は粗製深鉢の口縁部片である。1～3・6～7は内外面は二枚貝による条痕、口唇はナデによる調整がされている。4は内面は条痕、口唇はナデ、外面はケズリ後条痕とナデによる調整がされている。5は内面は条痕後ナデと条痕、口唇はナデ、内面は条痕による調整がされて



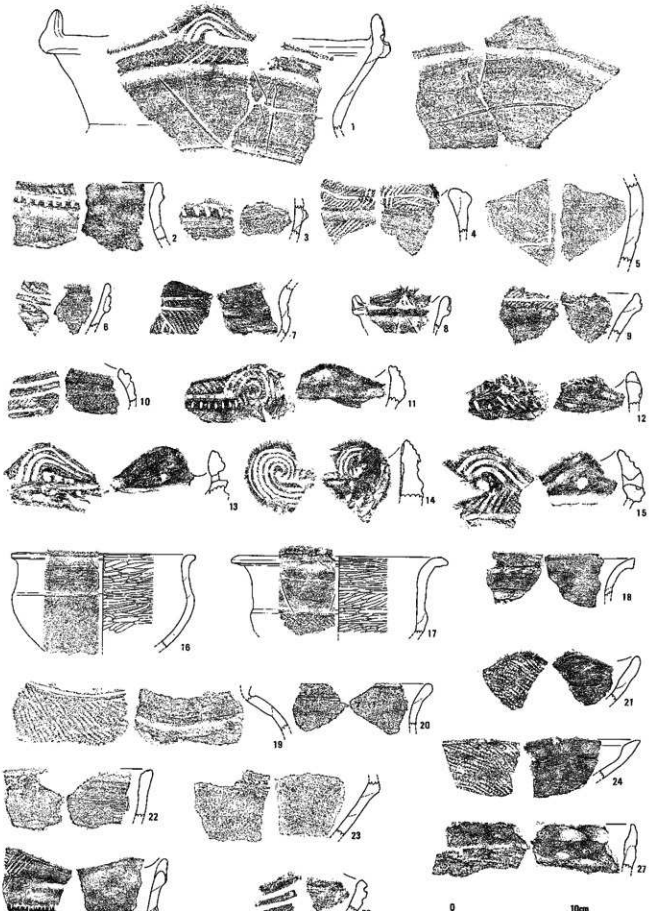
第144図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図（2）（1：3）

いる。8は内外面は二枚貝による条痕ナデ、口唇はナデが調整されている。10～12は内外面は二枚貝による条痕、口唇はナデによる調整がされている。13は内面は二枚貝による条痕、口唇と内面は丁寧な横ナデによる調整がされている。9は内面は二枚貝による条痕、口唇は丁寧なナデ、外面は二枚貝による丁寧なナデによる調整がされている。

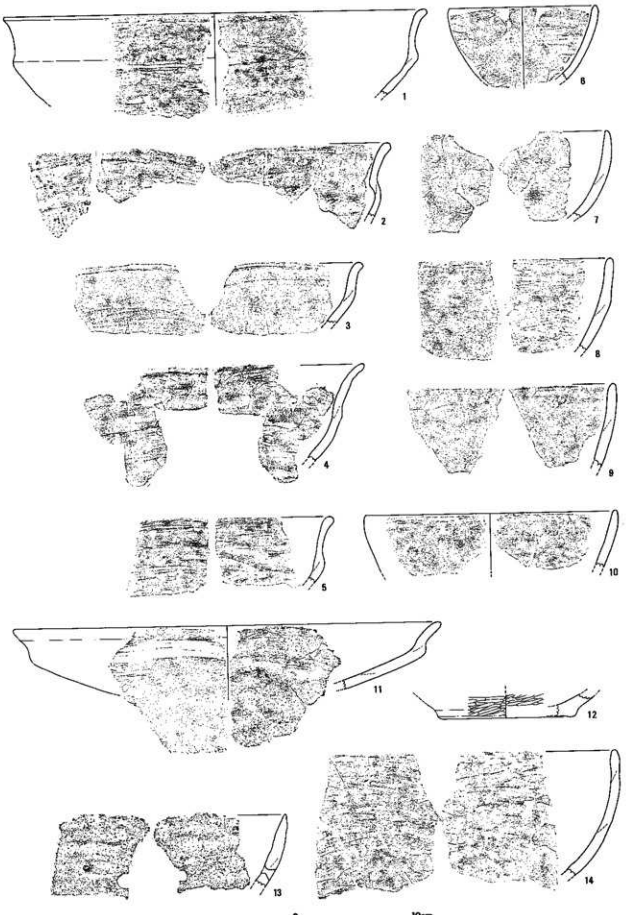
148図は、1・3は頸部の屈曲がやや強い深鉢である。1は内外面に二枚貝にナデを加えたものが施されている。3は体部片で、調整は内面は横方向の二枚貝による条痕、外面は横方向のナデである。2・4～9は深鉢で、4～7・9は体部である。2は口縁部片で、調整は内外面は横方向の二枚貝による条痕、口唇はナデである。4は内面は横方向の二枚貝による条痕の後ナデを部分的に加えたもの、外面は横方向の二枚貝による条痕による調整がされている。5は内面は横方向の条痕、外面は横方向のナデによる調整がされている。6は内外面に二枚貝による条痕による調整がされている。7は内面は横方向の二枚貝条痕の後ナデ、外面は横方向の二枚貝条痕による調整がされている。9は内外面に横方向の二枚貝による条痕による調整がされ、外部にススが付着している。8は底部の一部と立ち上がりの部分で、調整は内外面とも二枚貝による条痕である。

149図は、1～9・12～17は頸部が屈曲しない深鉢である。うち、3・4・12・13は口縁端部に指押圧痕が顕著な特徴的な土器である。1は内面は丁寧なナデ、外面は横方向の粗いナデによる調整がされている。また、外面にはススが付着され、補修孔が2つ穿孔されている。2は内面は丁寧なナデ、外面は横方向の粗いナデによる調整がされ、わずかにススが付着している。また、補修孔が1つ穿孔されている。3は内面は比較的丁寧な横ナデ、口唇外面は横ナデ、外面は少し粗いナデによる調整がされ、両面にススが付着している。4は口唇内面は指頭圧による貼り付け、内面はナデ、口唇外面は巻き貝による縦方向のナデ、外面は粗くて強いナデによる調整がされている。また、外面にはススが付着している。5は体部で、調整は内面は丁寧なナデ、外面は割りと丁寧なナデで、内外面にススが付着している。6は内面は横方向の丁寧なナデ、外面はケズリ後部分的なナデによる調整がされ、ススが付着している。また、基本的には片面穿孔されている。7は内外面はケズリ後ナデによる調整がされている。8は内面は横方向のケズリ、外面は横方向のナデによる調整がされている。9は内面に横方向のナデ、外面はケズリのち横方向のナデによる調整がされ、ススが付着している。10は内面は横方向のやや丁寧なナデ、外面はやや強く粗い横方向のナデによる調整がされている。11は体部で、調整は内外面は横方向のナデである。12は口唇内部に指頭による貼り付け、内外面はナデによる調整がされ、全体にススが付着している。13は口縁部片で、調整は内面は丁寧なナデ、外面は粗くて強いナデである。14は内面は横方向のやや丁寧なナデ、外面は横方向とやや粗くて強い横方向のナデによる調整がされている。15は内外面は巻貝によると思われる横方向のナデによる調整がされ、外面にはススが付着している。16は内面は横方向のナデとやや粗いナデによる調整がされている。17は平底の底部で、調整は内面はナデ、外面は粗いナデとナデである。

150図はすべて粗製深鉢である。調整は、1は内面は横方向の丁寧なナデ、外面は縦方向のやや粗いナデである。2は内面は横方向のナデ、外面口唇は横ナデ、外面は粗いナデで、ススが付着している。また、補修孔が両面に穿孔されている。3は内面は丁寧なナデ、外面はナデで、ススが付着している。4は内面は横方向のやや丁寧なナデ、外面は強い横方向のナデである。5は内面は丁寧なナデ、外面はケズリ後比較的丁寧なナデが施されている。6は内面は丁寧なナデ、外面はナデである。7は口唇は横ナデ、内面は横方向のナデ、外面はやや粗いナデである。



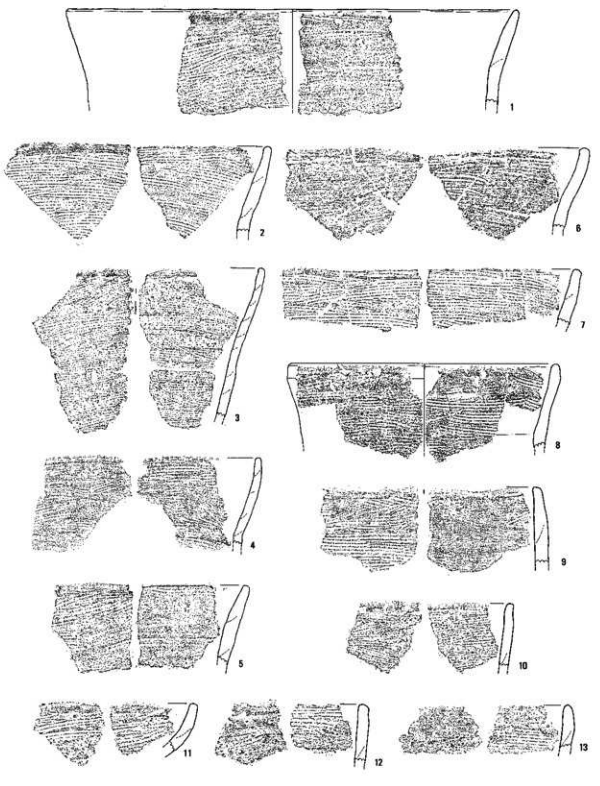
第145図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図（3）（1：3）



第146図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図（4）（1：3）

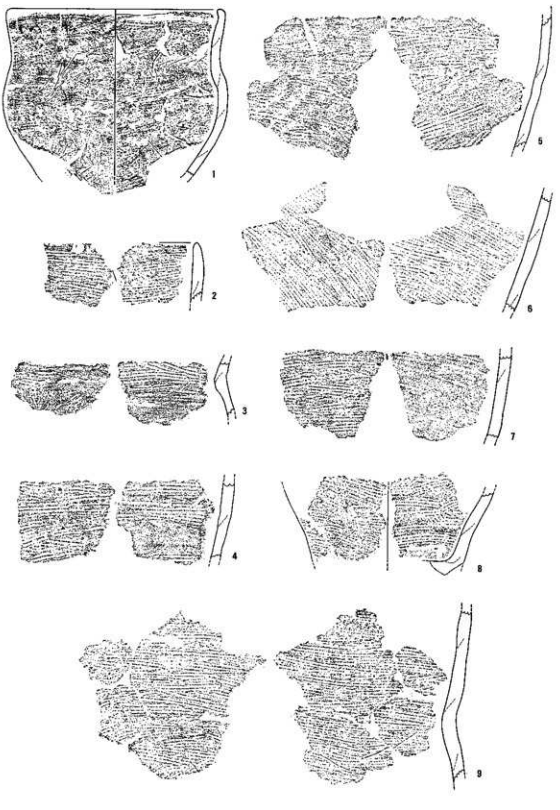
石器類（第154・155図、図版65）

第２黒色土層からは、石鏃４点、十字形石器１点、その他の小型石器３点、打製石斧３点、磨製石斧２点、石錘８点、磨石・凹石５点、石皿２点が出土している。

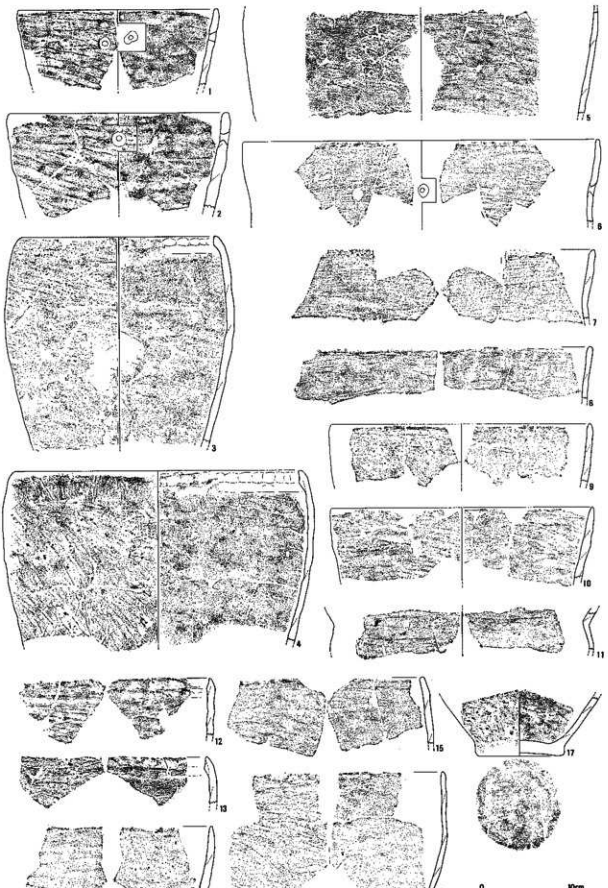


第147図　２区第２黒色土層出土縄文土器実測図（５）（１：３）

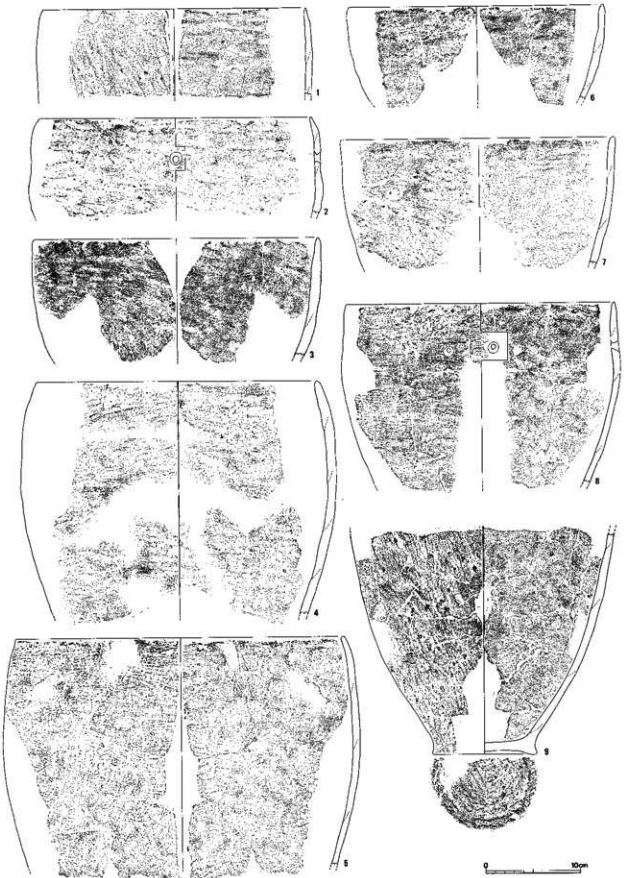
第154図１は十字形石器である。２～５は石鏃で、２は平基無茎式、３～５は凹基無茎式である。
６～８は打製石斧である。６は腹面と背面は節理によるもので、刃部には使用による刃こぼれと磨滅が見られる。７～８は側縁前面に剥離をもつ。



第148図　２区第２黒色土層出土縄文土器実測図（６）（１：３）



第149図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図（7）（1：4）



第150図　2区第2黒色土層出土縄文土器（8）（1：4）

9～10は磨製石斧である。9は刃部は使用による磨滅が著しく、刃こぼれもある。10は両側縁に敲打痕を残し、刃部は使用による摩耗が著しい。

11～13は器種不明である。12は断面が三角形で、側縁に加工があるため石錐の可能性がある。

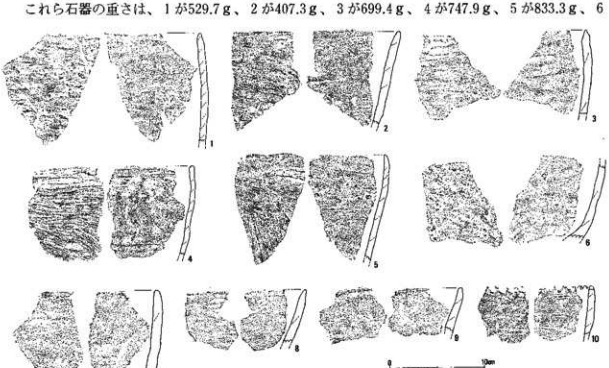
14～21は石錘である。いづれも円礫の長辺をそれぞれ2か所打ち欠いたものである。

これら石器の重さは、1が1.3g、2が0.95g、3が0.25g、4が0.32g、5が0.32g、6が96.1g、7が82.1g、8が139.6g、9が308.1g、10が197.8g、11が3.5g、12が5.8g、13が6.2g、14が153.5g、15が110.5g、16が115.8g、17が81.5g、18が95.6g、19が113.9g、20が101.8g、21が44.6g、長さは1が2.3cm、2が2.8cm、3が1.0cm、4が1.2cm、5が1.1cm、6が7.3cm、7が8.8cm、8が10.6cm、9が12.7cm、10が7.6cm、11が3.4cm、12が4.8cm、13が2.6cm、14が9.6cm、15が7.0cm、16が6.0cm、17が5.4cm、18が6.5cm、19が6.4cm、20が5.5cm、21が5.1cm、幅は1が1.6cm、2が1.3cm、3が1.1cm、4が1.0cm、5が1.2cm、6が7.8cm、7が6.1cm、8が5.5cm、9が4.3cm、10が5.6、11が1.4cm、12が1.4cm、13が3.4cm、14が5.3cm、15が5.7cm、16が7.0cm、17が6.3cm、18が4.4cm、19が5.2cm、20が4.8cm、21が3.2cm、厚さは1が0.4cm、2が0.3cm、3が0.25cm、4が0.25cm、5が2.5cm、6が1.1cm、7が1.35cm、8が1.7cm、9が3.6cm、10が2.45cm、11が0.9cm、12が0.9cm、13が1.0cm、14が1.9cm、15が1.9cm、16が1.8cm、17が1.8cm、18が1.9cm、19が2.2cm、20が2.3cm、21が1.7cmである。

石材は、1・4・5・13が流紋岩質の溶岩、2・3・11・12が黒曜石、8・10が無斑晶質安山岩、14・16・19・20が安山岩質の凝灰岩、15が花崗岩、17が流紋岩質の結晶質凝灰岩、18が閃緑岩、21がアップライトとみられ、6は石英安山岩、9は蛇紋岩ではないかと考えられる。

第155図1～5は磨石・凹石である。1・2・4には敲打痕による凹部があり、1は片面、2は両面と側縁部、4は両面に認められる。6・7の石皿は、ともに両面が使用されているとみられる。

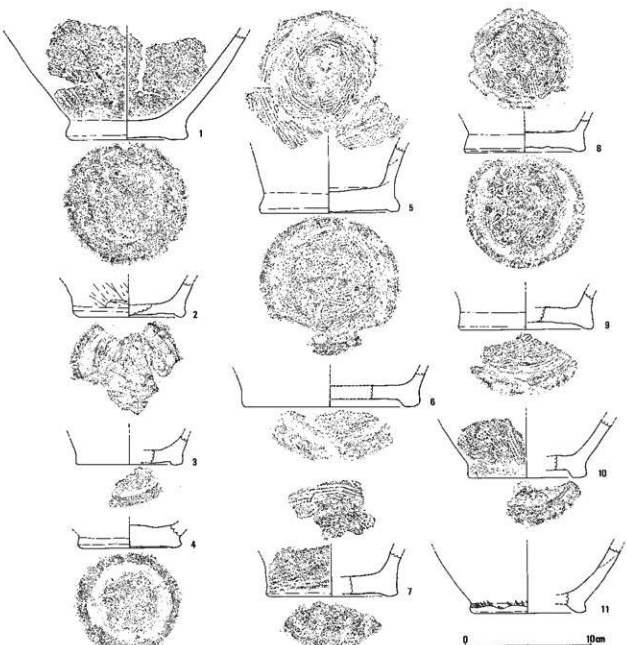
これら石器の重さは、1が529.7g、2が407.3g、3が699.4g、4が747.9g、5が833.3g、6



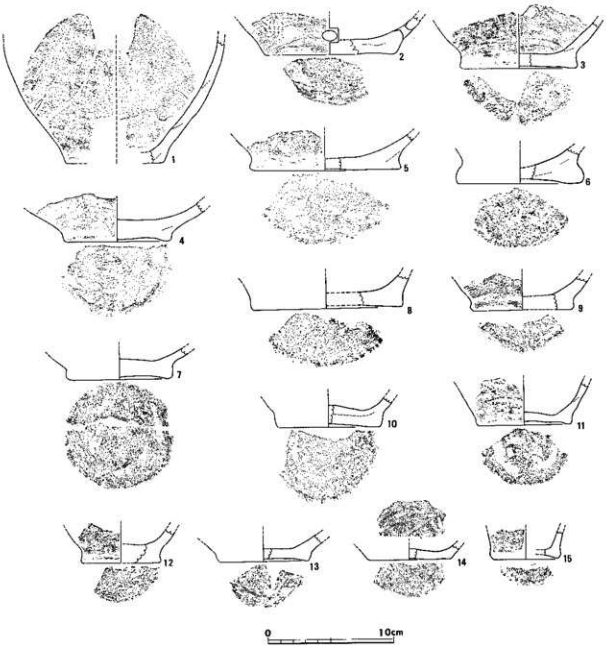
第151図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図実測図（9）（1：4）

が4.0kg、7が1.493kg、長さは1が10.7cm、2が9.35cm、3が9.2cm、4が10.4cm、5が10.8cm、6が25.2cm、7が16.0cm、幅は1が8.9cm、2が7.3cm、3が7.4cm、4が9.5cm、5が10.1cm、6が16.75cm、7が14.8cm、厚さは1が3.25cm、2が3.5cm、3が6.7cm、4が5.0cm、5が5.3cm、6が5.25cm、7が3.8cmである。

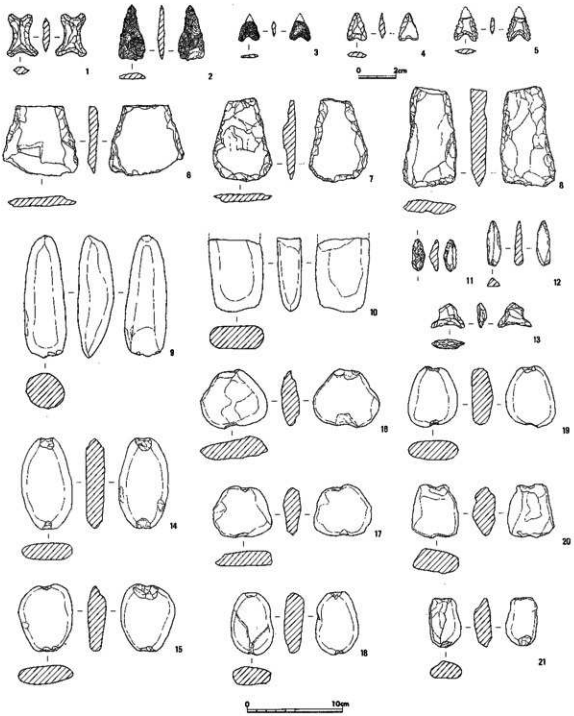
石材は、1と3が細粒の閃緑岩、2が花崗岩、4と5が斑晶質安山岩、6が細粒の花崗岩、7は流紋岩質の結晶質凝灰岩とみられる。



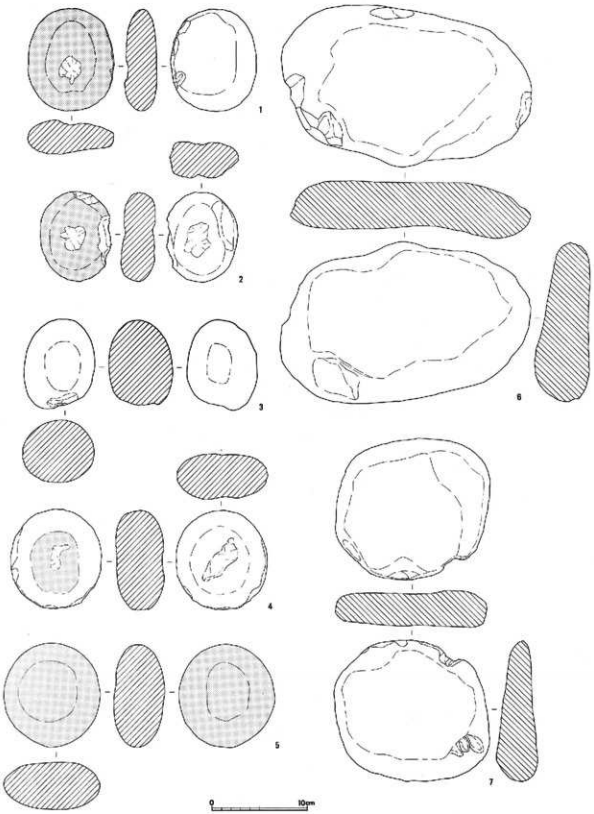
第152図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図（10）（1：3）



第153図　2区第2黒色土層出土縄文土器実測図（11）（1：3）



第154図　2区第2黒色土層出土石器実測図（1）（1：4、ただし1～5は1：2。）



第155図　2区第1黒色土層出土石器実測図（2）（1：4）

V－3　神原Ⅱ遺跡3区の調査

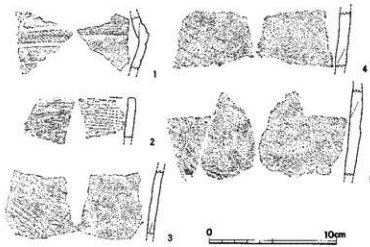
1．調査の概要

この調査区は、97年度に調査した2区のうちの一部である（第4図参照）。標高272～274mほどの地点で、97年度の調査では2500㎡が調査された。遺構には、弥生時代中期のものと考えられるSI04をはじめとする、計4棟の竪穴式住居跡や、掘立柱建物跡、土坑などが検出され、遺物については弥生土器片、土師器片、須恵器片などが出土している。このときは第1黒色土層および第1ハイカ上面の調査にとどまっていたため、当年度において第2黒色土層の調査を行ったものである。

調査は、まず前年度調査範囲内に3つのトレンチを設定し、北側から第1、第2、第3トレンチと呼び、順次土層の観察並びに遺構・遺物の有無について確認を行った。その結果、第1と第2のトレンチは、2～3mほどの第1ハイカ層を取り除くと、茶褐色粘質土を含む崖錐礫層となり、第2黒色土相当の層は認められなかった。出土遺物もなかったため、トレンチ範囲のみの精査で調査を終了した。第3トレンチは、深さ2～3mの第1ハイカ層の除去後、崖錐礫層に至るまでに第2黒色土層に相当するとみられる黒茶褐色土層が確認されたため、少し範囲を広げるなどして調査を行った。その結果、遺構は認められなかったものの、縄文時代後期の粗製の縄文土器の小片がわずかに出土した。なお、この土層は、山側ではほとんどなく、谷側に向かって次第に厚さを増していく傾向にあることが分かった。おそらく、西側の神戸川に向かって斜面を下るほど、安定した第2黒色土層にいたるとみられ、遺跡も広がっていくものと思われる。

2．出土遺物（第156図）

出土遺物は少量で、粗製土器の細片がほとんどである。ここではこのうちの5点を図化した。1は磨消し縄文を有する浅鉢の屈曲部の破片で、内面はミガキが施されている。2～5は粗製深鉢の破片と考えられものである。2は口縁部の破片で、端部は平坦面を有し、方形を呈している。2～5の調整は、内外面ともナデが施されている。また、2と4の外面にはススが認められる。



第156図　3区第2黒色土層出土縄文土器実測図（1：3）

Ⅵ　自然科学的分析

島根県飯石郡頓原町神原遺跡における縄文農耕の可能性と古植生について

渡辺政巳・杉山真二

(㈱文化財調査コンサルタント)(㈱古環境研究所)

1．はじめに

神戸川は中国山地を源に中国地方で唯一の活火山である三瓶山の東側を北向きに流れ、出雲平野に流れ込む。この神戸川の上流部では、三瓶火山噴出物に覆われた縄文遺跡が数多く発見され、発掘調査が行われてきている。(例えば板屋Ⅲ遺跡)。また、これらの遺跡群を特徴付ける要因として、縄文農耕の痕跡があげられる。藤原（1998）は、板屋Ⅲ遺跡出土の土器胎土からシコクビエやヒエ属のプラント・オパールを検出している。また、頓原町内五明田遺跡の古土壌より「キビ」のプラント・オパールが検出されたとの新聞報道もある。

今回の報告では、周辺地域で広域に認められるおよそ4000～3700年前の14C年代値を示す第2黒色土層（松井，1998）を対象にプラント・オパール分析および花粉分析を行い、同層堆積時期の縄文農耕の可能性を探ったほか、広く古植生について考察した。

2．試料について

図1に、神原遺跡の平面図を示す。図中の1～6が試料採取地点であり、第2黒色土層最上部よりプラント・オパール分析用試料を採取した。またNo.2地点は谷地形を示し花粉化石の含有が期待されることから、花粉分析用試料を採取した。No.2地点の模式柱状図を図3に示す。

3．分析方法・結果

プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い行った。

また、花粉分析処理は渡辺（1995）の方法により行った。プラント・オパールダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を検出された種類毎に示した。分析した全試料にクマザサ属型、ミヤコザサ節型が多量に含有されていた。また、試料No.3－1ではキビ属も検出された。

花粉分析結果を図3に示す。花粉ダイヤグラムでは、検出された種類毎に、木本花粉総数を基数とした百分率で示した。また、検出木本花粉総数が極めて少ない試料No.1、2では、検出できた種類を「＊」で示した。さらに、検出された針葉樹花粉、広葉樹花粉、草本花粉、胞子の割合を累積百分率で示した。花粉組成は、木本花粉ではニレ属－ケヤキ属が51%の出現率を示すほか、マツ属（複維管束亜属）が22%の出現率を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が21%、イネ科（40ミクロン未満）が11%の出現率を示す。

4．縄文農耕の可能性について

試料No.3－1から。僅か（600個／g）にキビ属型プラント・オパールが検出された。キビ属

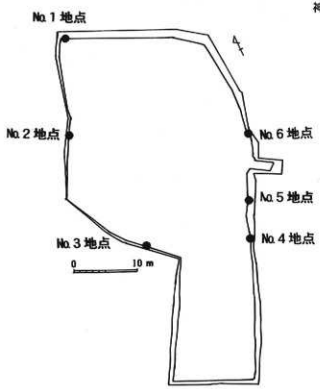


図1　試料採取地点

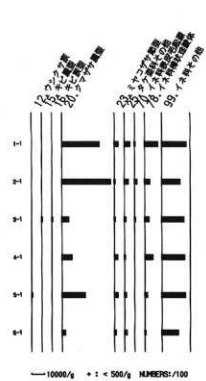


図2　プラントオペールダイアグラム

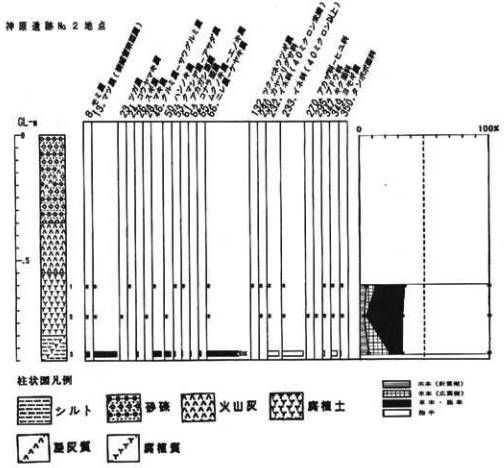


図3　花粉ダイアグラム

型には食用となるキビが含まれることから、キビが栽培されていた可能性が指摘できる。現在キビは畑作雑穀として扱われており、焼き畑では観られない。キビが栽培されていた場合、栽培方法について論議の中心となろう。とは言え、植物珪酸体の形態から栽培種（キビ）と野生種（ヌカキビなど）を完全に識別するには至ってない（キビ属からキビを識別できるとする論文は、1999年9月時点で報告されていない。）。このことから、今回検出された「キビ属」が野生種に由来した可能性も否定できない。

5．既知の資料との比較と森林植生

神原遺跡近辺では、板屋Ⅲ遺跡において花粉分析が実施されている（金原ほか、1998）。板屋Ⅲ遺跡では、およそ1.6～1.0万年前に堆積したと考えられる浮布降下軽石、降下火山灰層より上位の層準を対象に分析が行われていたが、今回の分析同様に花粉化石の含有量が少なく、充分な解析が行われたとは言いがたい。

板屋Ⅲ遺跡の分析結果のうち、今回と同層準（第2黒色土層）の試料は試料No.1～3である。ここでは、サンショウ属が卓越しスギ属、クリ属－シイ属を伴うことが報告されている。一方、今回の結果ではニレ属－ケヤキ属が卓越し、マツ属（複維管束亜属）を伴うほか、クルミ属－サワグルミ属、ハンノキ属も出現する。

今回の試料は調査地点内の小谷（TP＋274ｍ程度）の堆積物（水成の可能性もある。であるのに対し、金原ほか（1998）の試料は台地上（TP＋284ｍ程度）の風成層である。また現在の神戸川河床はTP＋250ｍ程度であるが、河川浸食を受ける前には河床が今より高かったことが推定される。以上のことから、今回の分析結果は主に（神原遺跡近辺の）神戸川沿いの様子を反映し、金原ほか（1998）の結果は主に段丘上の局地的な植生を反映していると考えられる。

したがって今回の結果から、河川内あるいは後背湿地にはハンノキ類を主要素とする湿地林、自然堤防上にはケヤキ、ニレ類を主要素とする河畔林、さらに神戸川沿いや流れ込む谷沿いには、オニグルミ、サワグルミを主要素とする渓谷林が分布していたと考えられる。

また、マツ属（複維管束亜属）、ハンノキ属の一部は遺跡周辺の荒れ地の二次植生として分布したアカマツ、ヤシャブシ類に由来した可能性が指摘できる。

6．草地（林床）植生

プラント・オパール分析では全試料を通してクマザサ属型、ミヤコザサ節型が多量に検出された。このことから、遺跡周辺にはチマキザサ（クマザサ属型の主要構成種の一つであるチシマザサの成育南限が鳥取県とされることから、多くはチマキザサと考えられる。）、ミヤコザサなどのササ類を主体としたイネ科植生が分布していたと推定される。ササ類の成育環境は原野から林床と広いことから、これらササ類が、草地、林床いずれの環境下で成育していたかの断定はできない。しかし、遺跡周辺にササ類が繁茂していたことは確かであろう。

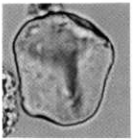
7．まとめ

花粉分析、プラント・オパール分析を実施し、神原遺跡周辺の第2黒色土堆積当時の植生を推定した。特記すべき事柄は以下の点である。

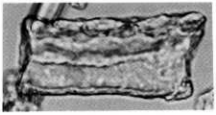
(1) キビ属のプラント・オパールが僅かであるが検出できた。現状では、キビに特定できないが、縄文農耕の可能性を示す事になる。
(2) 神戸川沿いの古植生が明らかになった。一方で板屋Ⅲ遺跡の花粉分析結果（金原ほか、1998）は、台地上の局地的な植生を示していると考えた。

引用文献

・金原正明・金原正子（1998）「板屋Ⅲ遺跡における植物遺体の同定分析と植生と環境」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５－板屋Ⅲ遺跡（付編）』，p.143-154.
・藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) －数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学９』，p.15-29.
・藤原宏志（1998）「島根県板屋Ⅲ遺跡出土土器胎土のプラント・オパール分析」『志津見ダム建設予地内埋蔵文化財発掘調査報告書５－板屋Ⅲ遺跡（付編）』，p.185-191
・中村純（1974）「イネ科花粉について，とくにイネを中心として」『第四紀研究13』，p.187-197
・渡辺正巳（1995）「花粉分析法」『考古資料分析法84,85』ニュー・サイエンス社

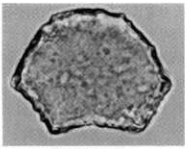


ウシクサ属型　約670倍

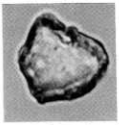


キビ属型　約670倍

クマザサ属型　約670倍

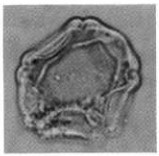


クマザサ属型

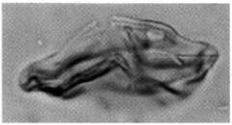


ミヤコザサ属型　約670倍

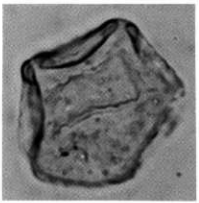
クルミ属－サワグルミ属　約1100倍



ハンノキ属　約1100倍



イネ科　約1100倍



ニレ属－ケヤキ属　約1100倍

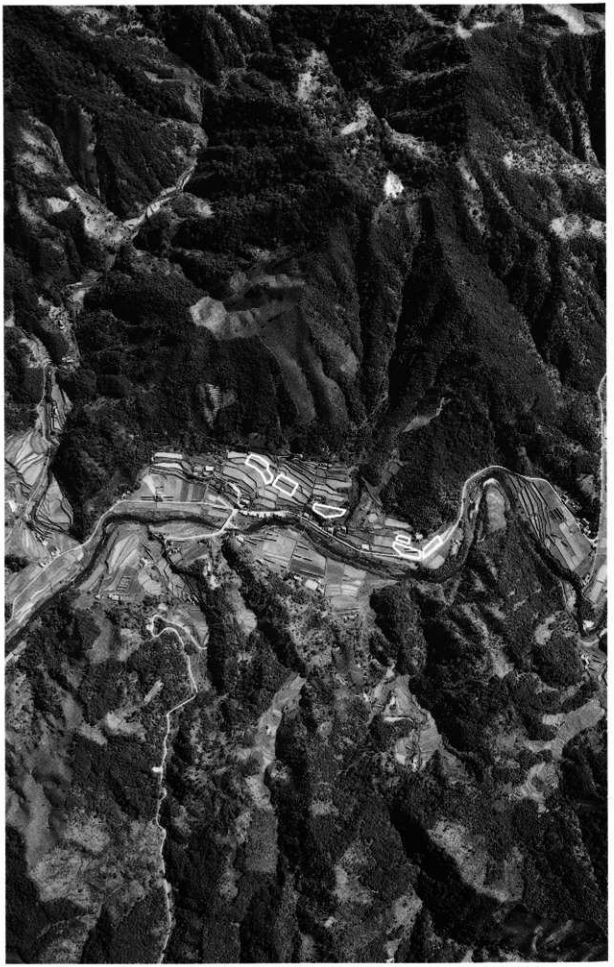
Ⅶ まとめ

これまで平成９・10年（1997・98）度に実施した、志津見ダム建設予定地内の神原Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査の概要を報告してきたが、ここで簡単なまとめをして終わりにしたいと思う。

平成９年度の調査では、遺構・遺物をあまり多く認めなかったが、既に実施されて多くの成果をあげた板屋Ⅲ遺跡と同様に、第１黒色土層にはじまり、続いて第２黒色上層、そして第３黒色土層へと、近世・近代から縄文時代前期前半まで、遺跡を層位的に把えることができたのは大きな成果であった。とりわけＤ区の第３黒色土上層からは縄文時代前期前葉の土器片群が出土しており、出雲地方山間部においてこの時期の貴重な資料が加わったものといえる。また、Ａ区やＤ区で出土した弥生土器のなかに、備後北部の塩町遺跡出土の土器を指標とするいわゆる「塩町式土器」の特徴を備えた土器片が認められた点も注目されるところである、神戸川を背景にしたこの時期の中国山間地における地域間交流の様子を知るうえで貴重な資料といえる。

平成10年度の調査では、縄文時代後期から近世・近代にいたるまでの資料が得られたが、なかでも２区の第２黒色土層から第２ハイカ上面にかけて検出した遺構群と多量の土器群は、この地点における縄文時代後期の集落の存在をうかがわせるものとして注目されよう。また、両年度を通じて、近世以降のものとみられる焼石の詰まった土坑が幾つか認められたが、これは麻蒸施設の遺構と考えられる。明治初期に作成された「地誌－出雲国飯石郡志津見村」（頓原町教育委員会所蔵）には、当地の物産として牛・香魚・米・鉄などと並んで「麻」があげられ、「一箇年出来高二百貫目、石見国ニ輸送ス」と記されている。近代の初めのころの麻生産の様子が知られる文献史料であるが、これらの麻蒸遺構は麻生産がそれ以前から行われていたことを具体的に示すものであり、地域の産業史を知るうえで貴重な成果の一つになったと思われる。

写真図版



神原Ⅰ・Ⅱ遺跡とその周辺の空中写真（白線内が調査範囲、約1：20,000、1964年撮影）

図版 2

神原Ⅰ・Ⅱ遺跡とその周辺の空中写真（南から）

同　　上（北から）

神原Ⅰ遺跡調査前写真（西北から）

神原Ⅱ遺跡調査前写真（西南から）

同　　上（南から）

図版4

神原Ⅰ遺跡A区調査終了空中写真（北東から）

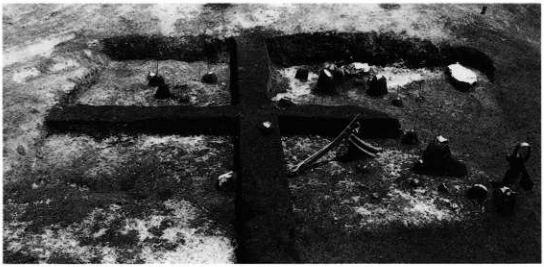
同　　上（南から）

A区調査終了状況（南から）

A区北側遺構群調査終了状況

A区南側遺構群調査終了状況

図版 6



A区ＳＩ01検出状況（南西から）

A区ＳＩ02検出状況（南東から）

同上石組煙道検出状況（東から）

A区SK01・02検出状況（北から）

A区SK01内土器出土状況（北西から）

図版 8

A区ＳＢ01・02検出状況（北から）

A区ＳＢ01・02検出状況（北東から、中央上ＳＫ05、中央下ＳＫ04）

A区ＳＫ04・ＳＢ01－Ｐ6検出状況（北東から）